

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

— 付『東京派』総目次・『河田誠一詩集』全文 —

桑 垣 孝 平
長谷川 敦 史

一 河田誠一の詩と生涯

(一) はじめに

稲門の詩人・河田誠一（一九二一—一九三四）を知っている人は多くないだろう。戦前、田村泰次郎や井上友一郎、坂口安吾など、戦後に活躍する文学者たちと誌面を共にし、彼らに才能を認められながらも、結核に倒れ、二十二歳の若さで夭折した。もともと交流の深かった田村による『大学』⁽¹⁾や『わが文壇青春記』⁽²⁾に登場したり、坂口の「二十七歳」⁽³⁾では矢田津世子とのキューピッドとして触れられたりするが、河田の作品や生涯がアカデミズムの世界において包括的に語られることはなかった。

アカデミズムの世界において、とあえて書くのは、この詩人について、遺稿類の収集・整理、伝記的調査他、今後の基礎となるような研究をした人が在野にいるからである。明治古典会の元会長で、古書業界に関する著作も多い青木正美（一九三三—）である。河田関係資料のうち、重要なものが残存しているのは、青木が五十年以上に、業者

間の市で誰も目を付けていなかった雑多な段ボール箱一箱に、鋭い嗅覚でもって札を入れたからである。河田誠一の「発見」とその後の青木の調査については、氏の著書『古本探偵追跡簿』⁴他に詳しい。

紅野敏郎は河田について言及した数少ない研究者の一人だが、「昭森社（森谷均）の『河田誠一詩集』」において、青木を次のように評している。「集め魔であると同時に書き魔であり、下町の一角より苦勞し、苦惱しながら、一人の確乎とした独立した人間になるべく奮闘努力。しかも青木はみずからの肉体の暗部にも立ち入り、私のうちなる姿をさらけ出す、いわば私小説作家の精神をも引きついでようなどころのある人物である」⁵。確かに、青木がその著書の中で遺稿類や関係者の証言を通し、河田の亡霊を追いかける姿は、適正な値付けをしようとする古書店主というよりも、身を賭して一つの物語を紡ごうとする小説家に近い。

二〇二一年七月、一度の休会を挟んで開催された七夕古書大入札会において、本学図書館は河田誠一自筆資料他一括を落札した。河田の死後、田村が引き受けた遺稿類の一部と推定される。本稿では、青木の調査に拠りつつ、河田誠一という詩人を改めて紹介するとともに、本資料を概観したい。河田の作品年譜の他、河田や田村の共同の成果で、本学図書館においては、長らく探求雑誌であった『東京派』総目次、また、現在入手困難となっている河田の唯一の刊行詩集『河田誠一詩集』⁶全文も付す。

(二) その作品と生涯⁷

河田誠一の著作は、本としては、死後の一九四〇年に『河田誠一詩集』が刊行されたのみである。本書の成立については本稿第二章で触れるが、田村と井上が跋文を寄せ、装幀は草野心平が手掛けた。部数は限定百部である。青木の調査の労もあり、現在は極少とは言え、流通があり、価格は高騰している。ただし、『河田誠一詩集』は基本的

未発表詩を編纂したものである。本詩集収録作にとどまらず、河田は生前、雑誌に多くの詩を寄稿していた。主な掲載誌は西條八十が主宰した詩誌『愛誦』で、中学生の時から二十歳まで投稿が続いた。河田の詩作の全貌を知るには、これら雑誌掲載作をさらう必要がある、切に河田誠一全詩集の刊行を願うばかりである。本稿に『河田誠一詩集』全文を収録したが、その他、比較的手軽に河田の詩を読むには、青木『古本市場掘出し奇譚』⁸がよい。未刊の自選詩集『夏の終り』の全文が翻刻されている。

二十歳で『愛誦』への寄稿が止まるのは、河田が詩作をやめたからである。あまりに短い詩作期間のため、あくまで便宜的なものに留まるが、河田の詩は通っていた中学校の校友会誌『巨鼈』に初めて短歌を発表した一九二六年（十五歳）～一九二九年（十八歳）までを前期、一九三〇年（十九歳）及び三二年（二十歳）を後期と整理できるように思う。早熟とは言え、前期も一九二九年になるまではやはり拙く、実りのある期間はおおむね一九二九～三二年の三年間という印象を覚える。前期は素朴で瑞々しく、後期は隱喩や象徴を多用し、幻想的な雰囲気を湛える。前期・後期に一貫しているのは、故郷香川の自然が描かれる点と、後述する河田のミューズ、清子との関係が通奏低音のように響いている点である。

詩人を紹介するにあたっては、その詩を引くことが良いように思う。本節では、河田の生涯を追いながら、彼の詩をできる限り引きたい。おのずと時系列となるが、やはり後期の方が完成されたものが多い。まずは死後刊行の『河田誠一詩集』から一篇、河田が晩年に参加した同人誌『桜』掲載の遺稿詩を一篇、引いておきたい。二篇目については、厳密には執筆期間は不明だが、作風から後期として良いだろう。

燃ゆる村落 放浪詩篇その一

人間がアミーバであつた時以来

鴉が「鳥」であつた時以来

炎天はいまにもかはりあらざりしならん。

われ、一日、太陽の寂寥になきやまざりしことのありたれば

月蝕の臭き春は暮れたり。

国境にひくく雨の山脈を俯瞰しつつ

自動車は骨のごとき人間をのせて下りぬ。

されど、わがごとき心重き足どりぞ。

夏はやく鶯の彼岸をはさみて憩へば

ああ苦行の溪谷のそこふかき花の群落の

碧潭のまひるをおほひたり。

火の花よ。

美しく素朴なる少女は裸體となりて水浴みせり。

そは、何の花かしらねども。

わがゆけば、いまはいづこも燃ゆる村落に見ゆ。
わが恋にやぶれて、うらぶれし白昼夢とも見よ。
犬のごとき女ぞ、わが朝夕に欠きたれば
われは孤独となりぬ。⁽⁹⁾

一夜

山峡の夜は晴れわたり
盲の藝者が三味線をひく風景、
あかい提灯をともし
夜は河鹿もうたひ出して、
あの宿へ泊まらなかつたよろこびに胸をくるしめつ。

また或る夜

峠路に日暮れて路傍の石にたちてありたり、
人馬まれなる山間のふかさよ
十里を歩きつかれてけふも

思ふがままにすすみえず、
金なれば
渴は水にうるほすのみ。

ここに時折とほりゆく山降りきしひとびとぞ

背の薪ただに軽げに

ああそこに若きも老ひたるも妻はまちてあればならむ

食事はあたたかく

貧しくも待ちてあればならむ。

われはひとり背に溪流のさわがしき音に眠らんとして得ず

またいためたる足をひきづりてあてもなくゆく。

たどりつきしは、吊橋の下の岩上なり、

夕ぐれの水黒づみてふかく

底に青苔を見る、

ここもまたおろかなり

水辺に横たへる蛇を見つけたれば

しづかに去りてゆく。⁽¹⁰⁾

河田誠一は一九一一年十一月二十三日に香川県三豊郡仁尾町中津賀に生まれた。後に交流を深める井上や坂口よりはいくつか若い、田村とは同い年である。四人兄弟の次男で、生まれてすぐに叔母の家に預けられ、五歳頃、実家に戻った。実家は商店を営んでおり、河田が九歳の時に父が亡くなると、母が切り盛りするようになる。河田もしばしば店に出たようである。誌面デビューは早かった。前述の通り、中学生の頃にはすでに西條八十の『愛誦』に詩が掲載され、名が知られ始めていた。この度の資料の中には、一九二七年一月一日から半年程の日記が含まれているが、元旦にも自身の同人誌の原紙を切ったり、別の日には、他の文芸誌から執筆の声がかかったりと、上京前から文学にまみれた生活を送っていたようである。

一九二九年、早稲田大学第二高等学院⁽¹⁾に合格し、上京する。そこで、河田と田村という二つの才能が出会う。戦後、田村は「肉体文学」を掲げて時代の寵児となるが、戦前の田村にとって、河田は親友であり、文学上の戦友だった。後述するが、共に『東京派』を創刊して切磋琢磨した後、二人は、当時相当な勢いがあった文芸誌『桜』同人となる。河田の訃報を受け、東京の友人たちを代表し、香川に赴いたのも、田村だった。そこで彼の引き受けた遺稿が『河田誠一詩集』に結実することとなる。田村は河田との出会いを『わが文壇青春記』の中で次のように振り返っている。

まもなく、私は一人の体格の貧弱な、度の強い眼鏡をかけた男と知りあった。(中略)毎月、「愛誦」を見せてくれるのであるが、だんだん、目次面の河田誠一という活字が大きくなり、それと同時に本文の、いままで三段に組んであった彼の詩が、しまいには一段で大きく組まれるようになった。(中略)私は彼の豊かな才能にあふれた詩に接して、一目も二目もおいた。それにこれは、後のことになるが、私たちの最初の同人誌「東京派」を一

しまにやるようになって、印刷屋との交渉、原稿の割付、校正、広告の獲得に、もの馴れた水際だった手腕を發揮した。⁽¹²⁾

前述の通り、河田の詩の主戦場は生涯『愛誦』だった。一九二九年も多くの詩を掲載しており、上京後、八十との面会も果たしている。あまりに早い死去故に、後期においてさえ、河田の詩にはむらがあり、あと五年あれば、と思わざるを得ない。小曲や童謡も多かった前期は特に習作の域にあるが、一九二九年になると、光るものが出てくる。後期には後退してゆく瑞々しさも留めており、河田の詩作における最初の成果と思われる。二篇、引きたい。なお、二篇目に使用されている語「サンパン」とは、人や荷を輸送するための小型船のことである。

月光の中に

この廃港に来て朽ちた棧橋を歩み
まあるい金色の月を見上げた。
小船の帆柱はゆるい蛇状を描き
ゆら、ゆら、ゆらとゆれてゐる。

今日のひる

コケットの少女がやつて来て

オリオンはどの方角へ出るのと聞いた。
棧橋。

ぼくのマントのえりを、

ひゆつ、ひゆつと過ぎる凍つた風

もう少女が来ないのかしら。

瞳。月光にゆれて光つた瞳。

ああ、

また明日の寢覚めに

夜見た夢の幸福を抱きしめて泣かう。

火星が出てゐる。

波に、ゆられて泣きたい。⁽¹³⁾

サンパンの春

うたをうたつてゐると

透きとほる水に泳いでゐる小魚達が

みんな、ほくのいい声に嘆息をつき
ブク、ブク、ブクとサンパンの春。

ゆふぐれの、黄金色にけぶる三日月と淡い緑いろの空と、海が見える丘と
月見草のまばらにある、草がぼうぼうとした坡堤。

うたをうたつてゐると

星たちが空になみだを光らし初めて

ほくのいい声音を、じつと見下しながら聞いている。

（あの涙はやがて雨になつて降るだらう。

星が涙をおとすとき、人間も静かに重い憂鬱に沈むのだ）

うたをうたつてゐると

都の空にうすい夕ぐれがながれて

けふは黒い飛行船がすぎていった。

その音にふるさとのことをかんじて、

母はなみだぐむでぼくを考へてゐるだらうとおもふ。

おかあさんおかあさんと呼んで見て

星の白いまたたきに

地上にけぶり初めた春を見つめながら

黄色いお月さんと話してをる。

ブク、ブク、ブクとサンパンの春。⁽¹⁴⁾

さて、高等学院に入学した河田は、後に「チボー家」の訳出他で知られることとなる山内義雄の授業でモーパッサンの短編に触れ、小説も書くようになる。一学年上の西川満が出していた『羅女奈土』に習作が収録された。『羅女奈土』は生原稿を綴じただけの、言わば回覧誌である。三重県立図書館の田村泰次郎文庫に一号、所蔵が確認でき、この度、現物の調査を行ったところ、先行研究では未言及の「坂」と題された河田の小説が発見された。『羅女奈土』については第三章で改めて触れる。

翌一九三〇年、河田は高等学院を落第し、春頃、四国を放浪する。この時、一説によれば『河田誠一詩集』の元となった「放浪詩篇」と題されたノートが執筆される。また、分量にして二百枚とも言われる「四国一周旅行」が『大阪化粧品商報』に掲載されたとされるが、青木も同資料は未見である。その後、河田は再上京し、田村たちと『東京派』を創刊。同年十二月のことで、河田はまだ十九才だった。創刊号には、河田によるものとしては、小説「日本悲歌」、翻訳「ヴィヌスの墓」「停止」、編集後記が掲載された。この年も『愛誦』には多くの詩を寄稿している。先に述べた通り、作風に変化が見られ、詩人として脱皮し始める。二篇、引いておきたい。

白氷の扉

火のやうにせつなくもゆるこゝろに

ミミイよ。

秋は白氷の扉。
はくへうとびら。

奇跡の街のかぜは羊の冷い乳房をながれ、
きせつ

櫟林をゆく影はとほい木霊のさやぎに消える。

苦行の溪谷、
たに

文明の星。

鱗は卵の溶けた満月のなかを

青い馬にのつて海底をくぐるあの人の童貞を追ふ。

赤い耳環とサイレン塔。

淡麗な秋のみなどに

そのあした、白い山嶺はそびえたか。

×

夏の海ほのにもゆる夕は

ミミイよ。

わが胸の火のかなしみ極まりなく、

赤い月は、ボロボロの性欲。

ざるを、

昆蟲は星となり、

墓石はみごもつた子宮をたべ

せ、はいはくらがりの重圧をかんじない。

失意の耳。

アネモネの春。

わが若き青き生活に

火よりもなほはげしくうたふいのちに

ミミイよ、

かたき白氷の扉。⁽¹⁵⁾

ひつぎぶね

枢船詩篇抄

冬夜^{とうや}。地平の重い波のあひまをとほく

暗転のドオムを踏みしだく荒野の巨塊！

淫奔な野情の月が白い月経湾をのぞきこみ。経水の雨がやんでしまった。

そこにチリチリと燃える星の沈没があり

石南シヤクナケはだまつて目をとぢた。

ずるずると霧がすが流れる。

海には魚が住まない。

×

倫落する隕石の日よ。

蒼ざめて、春の猿ましじは黒い女の林にひそみ

僕はニコチン臭い受話器でオリオンと話してゐる。

黄色い花粉をついばんだ流島の哀恋の候鳥は死んだのである。

積雲のさむい日の低空に弾丸が放たれ、

天球の息吹けるなかにめくるめく太陽がのぼり

リリカルなさざなみの光りに溶ける森がある。

狐よ

枢船の流れる熱帯の海にゆかう！

犬が、鈍い節調にふるふる笛におびえて遠吠える深夜の、恐ろしい宇宙のはてしに

阿弥陀如来に流れる黒い夕日をかんがへ

犬のごとくうろうろと漂ふ枢船を追はうとする。

火があんなにもえつゞけてゐる。⁽¹⁶⁾

翌一九三二年春、河田は兄・義春の法事のために帰郷。そして、従妹であり、生涯のミューズでもあった海本清子（二九一四？～一九四九？）と共に東京に戻った。河田の母方の祖母が恋多き人で、河田の母と清子の父は異父だった。清子の両親は早世し、河田が幼かった頃から、清子は折に触れ、河田の家に入入りした。清子も恋多き人であり、彼女への愛憎が、河田の作品に色濃く影を落とす⁽¹⁷⁾。以降は、一時の家出などもありつつ、主に清子が働き、河田の生活を支えたようである。赤貧だった。河田の実家には彼の無心に応える財力はあったが、清子と、彼女をよしと思わなかった母との関係を、河田が慮った。

この年は『東京派』が二～六号まで出て廃刊。河田の詩の主戦場が『愛誦』だったことはすでに何度か書いたが、自身の『東京派』には主に小説や評論、翻訳を發表した。この頃の河田は創作の軸足を小説に移しつつあった。確認できる限り、翌一九三二年以降は、河田の死後、遺稿詩が發表されるまで、詩の掲載誌はない。河田という文学者の全体像を描くにあたり、小説にも紹介すべきものがあるが、紙幅に限りがあるため、本稿では詩作の概観を優先したい。河田が詩を書いた最後の年は、質的にもっとも充実した一年だったと言える。三篇、引く。

恐ろしき花

あくびする一茎の蒲公英を摘みてすてたり。海をこえたる遠国に
たかだかと咲く花をおもはん。

一日、われわが妻を抱きて不覚となりぬ。

アンナ・エウアランチノヴナあれはおまへのお友達ぢやないのはしりゆく飛行機を指せばわが妻泣きて答へぬ。

ヨヒイム、あれはおまえの靴じあないの。

恐ろしき花咲きぬ

月のなき街にひねもす咲きぬ

殺せば花のむごき事かな。

ああ一羽の蝶わが下唇を掠め

その翅粉いまもとれず暮れぬ

恐ろしき花、下唇に咲きぬ

われ死なば花も死なん

われは死に切れず。⁽¹⁸⁾

アラビヤ夜話 —— 青春否定の詩 ——

桜咲けばいまは、黒き海の夜の耳鳴りぞ。

われと女とのいくとせの恋のいたみに

はるばると南方の野薔薇をおもひ

今日の日かへりくれば散りたる花の、みにくさに空は晴れ、
猖猖蜻蛉しやうしやうとんほとばぬきらめける街の閨房は
白き股、白き乳房黒く染めたり。

熱病のあけくれの港町犬に似て恋ゆゑに愛ゆゑに小雨もよひの眼がしらを、

日のしたをゆけども、何のかげもないと泣くのか！

泡盛に臭く酔ひまぬけた海だ青くつままない毒の海だ。

やかましいカンゾネツタ梟よりガサガサ泣く一寸悲しげなスマイルナー風景

情のような花のよなピカソの雲のとぶ日ぐれ

緑の蝶が舞ひ死ぬといふのだ。

たつきとは花のなき小化物……サフランのながあめに、はつ恋の女のそむきいまははや乱れたる人妻のものごし
ぞ！

神かぜは強くともみごもりし鴉の泣きて萎沃刺那マヨウラシに毛萇花に木精にアネモネに火と燃ゆるあけくれの傷のうづき
に。

日のしたをゆけどもなんの春さへなしと女はなきぬ。⁽¹⁹⁾

フラスコを石だたみに落したら

粉葉微塵に砕けたよ、春、これは秋の花ぢやあないかといつて俺は狂つてゐるといはれ、砂時計は午前二時
ペンをとるけふも鼻血が出るのでそれで月と鴉がとばぬよるなのか

秋の沖風がくる窓をいつしんににめつけると、「あたしは春風なんです」と哭いてゐるのがきこえる俺はおよく
女の魚もおよく。

深い海の底だ。

鼻血で、ノオトに書くと花はどうも「花」の一字しか、花は桜満開のくもりぞらだ。

花を見る。

鬼を躍らす。

飛行船

飛行船。

潮のくるカフェの窓下の石垣が見えたあのきらきらする日暮につかんで捨てた水面の花。

化石がしやべるうつつすらときたなくしやべる。片片と、芥川龍之介が竹馬に跨つて女のやうにとんでいつた曇天
の日に

猫に沈む烈日の夏をおもひだして

鼻血のやうに喉血が出た。

鬱金桜の花かげに蟲がゐたので喰べた

さんさんと水がながれたいまも流れてゐる。ここは白色病院の看護婦の腹のなかにある腹の中にあるよ
あすこに酔つた男が軍艦を押ししてゐる

軍艦のクルマが廻る

飛行船の女

飛行船⁽²⁰⁾

一九三二年、河田は加宮貴一の『今日の文学』や中河与一の『新科学的文芸』に小説や評論を掲載。前述の通り、詩の発表はなかった。さらに翌一九三三年、田村、井上、坂口らと参加した『桜』が創刊される。後に金銭トラブルに発展するが、本郷にあった中西書房という出版社がスポンサーとなり、同人誌としては鳴物入りだった。紅野は同誌を「すでに同人雑誌時代の修行をつみ、昭和文学の新人として認知されてもいた人びとの結集の場——それが『桜』であった」と紹介する。⁽²¹⁾『桜』創刊は三月二十一日付の『読売新聞』朝刊でも報道されている。「文芸雑誌『桜』発刊／新興派以後の運動／新進十氏の結成」と題された記事は「桜の会」の発会式が山王ホテルで催された旨や、同人たちの執筆歴を写真付きで伝えている。⁽²²⁾

河田は本こそ出していなかったが、すでに多くの作品を発表しており、「新進」として評価を得ていた。戦後、重要な作家を多く輩出する保高德蔵編集『文芸首都』（一九三三年四月号）に小説を掲載したことにも、目配せだけはしておきたい。しかし、六月、河田は体調を崩す。七月には咳がひどくなり、ただし実家には戻れず、何とかしのいだ。八月七日付で母に手紙を書き、医者代を無心している。「もう、手紙も書けるやうになりました」と始まるが、結局、

恢復せず、帰郷。

一九三四年一月三日、高松赤十字病院で咯血。同月二十八日、仁尾の実家ではなく、高松市塩上の家に移される。長期戦が見込まれたからだだった。清子が看病にあたった。命日となる二月三日は、体調が良かった。昼食には鮪の刺身や焼き鯛を食べた。午後四時頃、今川焼が食べたい、と清子に伝えた。清子が町に出、今川焼を買ってくると、河田は蒲団の上で亡くなっていた。口から血が垂れ、赤い塵紙がいくつか転がっていた。享年二十二、あまりに短い一生だった。

田村が遺族から河田の訃報を受けたのは、葬儀も終わった六日だった。前述の通り『桜』同人を中心とする東京の友人たちを代表し、田村が香川に赴いた。この時のことは『桜』二巻三号（河田追悼号、一九三四年七月）に日付と共に詳述されている。田村は二月十日に仁尾の河田の実家で仏壇に手を合わせる。戒名は泰雲玄道信士。その夜、河田の遺稿を整理した。

風呂から帰って、君の書き遺したものを出して貰って整理する。君が今日までの君の全部を賭けて書こうとした長編「山雀」の一節、その四に当る「新城榛名の手記」二百枚が、ガツチリと綴じてあるのがまづ目についた。詩は君は二十歳までしか書かなかつたから、いま私の手許に遺された詩も全部その年齢までの作物である。あれからこれへといろいろ掻き廻して、兎に角詩を書きつけた四冊のノートと書きかけたのも入れて数編の小説を纏めて風呂敷につつんだのが午前一時頃、それから君の育つたその部屋でやつと寝に就いた。⁽²³⁾

本稿の冒頭で引いた「一夜」や、右の引用で触れられている『山雀』の一部他、河田の遺稿は『桜』や『翰林』、『歴

程』に掲載される。そして、六年後の一九四〇年に『河田誠一詩集』が刊行される運びとなる。

(三) 友人たちにとつての河田

『桜』二巻三号＝河田追悼号には、田村や井上、坂口だけでなく、菱山修三、矢崎弾、北原武夫、中島直人⁽²⁴⁾、津世子、大島敬司、永山三郎、秋田滋、沖和一、真杉静枝、久野豊彦、中河与一が寄稿した。紅野は同号について、次のように記している。「これはまだ一冊も出さぬ新人としては、なんと多くの人たちによって、惜しまれたことが明白にみてとれる。各方面から集まってきた、当時としては中堅に近い存在とみなされてもいた「桜」同人の、河田への思いが、ここに結集して⁽²⁵⁾いた」。

河田は友人たちにとつて、どんな存在だったのだろうか。田村、井上、坂口の追悼文を引きたい。まずは、田村から。田村は『桜』同号より前に『今日の文学』に「天才河田誠一を悼む」という文章を寄稿している⁽²⁶⁾。

彼の文学が、南方の風景、風俗、人情を描いて瑰麗燦彩を極め、一個独自の境地を創出したのは、疑ひもなく、彼の破天荒な天才のためであると躊躇せずに私はいへる。(中略)事実、一昨年の四月か、五月に私が本誌に「河田誠一」なる一文を寄せて以来の彼の今日までの成長に徴して見ても、彼のこれからの成長、飛躍は計り知るべからざる概があるのだ。この一事は、誰よりもよく自らの長所と短所とを知つてゐた彼にとつて、それこそ千萬年過ぎても断じて消えることのない恨みであるに違いない。

彼の人間としての立派さ、気高さ、面白さ、味の深さについては、幾ら語つても尽きないだらう。そしてまたこんな匆卒の間に不用意に語り出すには、それはあまりに高く、遠く、遙かな位置にある。彼の友達への友情、

それは友達への透徹した、寛容な理解と友達への親身な配慮となつて現はれた。

田村と河田が無二の親友だったことは先に述べた通りである。田村は次のようにも書く。「一人の男子にとつて、真の親友はその生涯に於いて恐らく五指を屈するほど廻り逢へないだらうと思ふ。河田は私のさういふ親友の白眉なのである」。或いは、次のようにも。「雑誌の上では無二の仲間でも、芸術の上では彼は私にとつて絶えず恐ろしい競争相手であつた」。

続いて、井上が『桜』に寄せた「昂き人」からも引きたい。詩的な趣を湛える井上の追悼文は、全文にわたつて大変心のこもつたものである。追悼文中、井上は自室から見える大きな檜の木に河田を例える。河田が皆に好かれる好人物だったことと、才能を持ちながら、二十歳で詩作をやめてしまったことが、かけられている。

私の棲む部屋の窓から、真正面に、高く聳える檜の木が見える。

河田はよく私を訪ねて来て、その豪壮な逞ましい檜の木に、ほんやり眼鏡を霞ませてゐることがあつた。「いな、大きな木は。」そんなことも時々言つた。

(中略)

実際、河田は樹木のように、うたはない男であつた。そして樹木が自然に抗するやうに、自然に抗しながら大きく育つた。風蝕はなかつたが、風の方向に従つて自分を育てた。彼の懐中には、いつも自然が一杯つまつてゐるかに見受けられた。私はよくそこから薔薇の花や、日の光や、風の音や、鷗の羽搏きや、時には騒がしい荒磯の浪を感じたりした。もしか躓いて倒れると、そこらぢゆうが歌で一杯になりはしないかと思はれる程、彼はそ

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

れを溢れるやうに抱えてゐた。言ひ換へると、彼のゆたかな沈黙は彼の豪華な歌であつた。彼の歌はぬ理由は、そこにあつた。⁽²⁷⁾

井上は『河田誠一詩集』の跋でも次のように書く。「河田と私との交遊は、単に親しく交わつてゐたといふ以上に、生涯の仕事を通じての友達だつた。つまり私から云はせると河田と深く交れば交る程、それだけ仕事の上からも勉強になる、といふ風な具合であつた。いい友達とは、いつの場合でも、これだと思ふ」⁽²⁸⁾。

一九九三年、青木は調査のためにまだ存命だつた井上に連絡を取っている。一九九七年に他界する井上はこの時、入院を繰り返しており、結局会えずに終わるが、青木が送つた手紙の返信に次のように記した。「河田誠一のことですが、貴殿に必要と思われること、何項目にわかれても結構ですから、くわしく御教示下さい。出来る限り、細密に御説明、御知らせいたします」⁽²⁹⁾。河田の死から六十年が経とうとしており、井上の河田に対する友情の深さが感じられる。

最後に、坂口の追悼文も紹介したい。『桜』河田追悼号の中でも、坂口の「愉しい夢の中にて」はやはり読ませる。坂口は夢の中で旅先の田舎にいますが、気分が晴れない。一人で歩いてみると、河田が森の中からぬつと現れて、突如場面が変わり、二人はニースの海岸とも思われる、美しい場所を一緒に旅する。束の間、坂口のお気分が本當に晴れたところで、目が覚める。

そこで私は目が覚めると、すぐに河田のことを考えやうと努力したが、結局河田は人の記憶の中では、こんな人生の楽しい姿と一緒に残る人だらうということだつた。彼はひどい貧乏であつた。無一文で、ガスも電気もと

められて、食事もできない毎日の中で、恐らく人間としては最も窮乏した生活を暮らした男であるが、あそこまで窮乏すると、もう人間は妙にみぢめな暗さからは脱け出してしまふ。尤も河田には人間の底に光があつた。そして逞しい気骨があつた。だからあの男はどん底の中にあつても、決して身辺に湿気といふものを持たなかつた。思ひ出すと懐かしい。私の中では永遠に暗くならない。

私は河田の芸術が好きであつた。あの男は沢山の失敗作を書いた。大部分は失敗の作であると思つてゐる。併し、あの失敗の底に光る高い精神と、輝く眼光は大成の日の豪華さを思はせたのであるが、今は仕方がない。⁽³⁰⁾

振り返つてみれば、三人の中でもっとも長く読まれることとなつた坂口も、成熟の余地があるとは言え、河田のうちに才能を見てとり、また、彼を友人として愛した。引用箇所の前段の書きぶりは墮落論に繋がるようにさえ思える——同時代人たちの河田評に目を通して見ると、戦前、早稲田の近くに形成され、まもなく飛び立とうとしていた文学的才能の群れの中に、重要な一羽として河田がいたのがよく分かる。⁽³¹⁾⁽³²⁾⁽³³⁾

(四) 遺稿のその後

河田の死から三十年以上が経つた一九六七年秋、当時、明治古典会所属の古書店主だつた青木は、業者間の市で、ある雑多な段ボール箱に出会つた。青木の記憶では「詩人原稿等もろもろ」とか書かれ、いかにも値さえ付けばよし、といった感じで、目を向ける者はほとんどいながつた。一日約十回の開札があり、注目度の低い品は前半に回る。この段ボール箱は初回だつた。もともと自筆資料が好きだつた青木は、段ボール箱の中に田村による追悼文などを見つけた。青木は一月前に田村の自筆資料一箱を落札しており、そのことが頭をよぎつた。

当時の古書業界には「建場廻り」という職種があった。屑屋がりヤカーを引いて街を巡り、家庭などから再利用できそうな古物を集めてくる。夕方になると、その荷が「建場」に集まる。「建場廻り」は文字通り建場を廻って、紙屑の中から古本等を求めてきて、業者の市に卸す。河田資料は田村資料と同じ建場廻りから出品されていた。色々な建場に顔の利く、よく知られた人だった。

青木が河田資料を落札した後日談だが、直前の夏、その建場廻りは新宿の建場で二つの段ボールを紹介された。田村の少年時代の日記まで含まれており、田村の家から出たものとすぐに分かった。その建場廻りは田村資料の一つの段ボールに、名の知らない、おそらく値の付かない詩人の資料をもう一つにまとめた。河田資料の方は買うのをためらったが、やはり勘が働いた。田村が脳血栓で入院した頃で、それがきっかけは分からぬが、手放され、建場に流れたものだった。

よく残ったな、と思う。この建場廻りも青木も、河田資料を求めた時、彼が誰か知らなかったのである。建場に運んだ屑屋は、田村さえ知らなかった。どの時点で破棄されても、おかしくなかったのである。一部ではあるが、時空を超えて本資料を迎えられたことをうれしく思うと同時に、責任を感じる次第である。なお、青木の調査によれば、河田の実家に遺されていた資料は焼失してしまったそうである。青木が河田資料に出会った時の回想を引き、第二章に移りたい。

開札時間があと十分ほどに近づいた頃、私はそれでもその箱を覗きに出かけた。元々手書きのものには興味があるのだ。つけられた封筒に書かれてあるように、中は河田誠一とかいう人の詩稿やノートや、発表誌の切り抜きやらであった。やはり切り抜ききの田村泰次郎の追悼文も見えた。

「あの口か」と私は思った。

一ト月前に、こうした雑然とした口で田村泰次郎文書の一箱が出、やはりAさんが持ち込んで来たのを私は知っていた。いや知っていたどころか、実はあの一箱を買ったのも私だったのである。市場の扱いは大分違い、けっこう人気もあり、四万数千円かの落札価であった。あれはしかし、田村の少年時代の日記、兵役にあたっての手記も何冊かまじり誰が見ても面白いものだった。どうやらこちらは、早く死んだ同人雑誌の仲間の文書のようだ。私は箱から原稿一枚を引っぱり出して読んだ。「詩二編 河田誠一」とあった。

非情

夏ちかく

夜市に買いし泣き人形。

妻もなければぬかるみに我は泪ぐみるたり。

金柑の花をあらそひて傷つけし

幼き頃の友の頬はやせてあつ、

淡き人ごみの意識をわすれ、

わが胸ひたぶるに冷えし夜ぞ。

憂金桜

君まさかね、

たのしければほのかに月の蟲もうすれ、

うこん桜の雨を惜しみつ。

この雨。

君まさねばこゝろあかりて

涙さんと流れぬ。

夏よ来よ。

われは男にてありたり。

私はこの二つの詩の、何とも言えない好ましいリズムに惹きつけられ、一つぺんで雑物一箱に惚れ込んでしまった。私はどうせ人が入れてないのだからと、いったんは最低値の入札をしたが、もし間に入札者が出たら大変と、上札をペラ棒に高く書いた改メ札を書いてもう一枚そこへ入れておいた。その頃になると、あとの二、三分が十分にも二十分にも長く思えるほど、私はその品を獲得したい気持で一杯になっていた……。

心の内で大騒ぎしていたのは一人私だけで、やがて只同然の私の下札に発声されると、同僚の一人によって箱のフタが四方から閉められ、セロテープで入札ふだがつけられて隅の方へ放られてしまった。³⁴

——ちなみに。青木によれば、当時の最低入札額とは五百円である。

(桑垣孝平)

注(第一章)

- (1) 田村泰次郎『大学』(東亜公論社 一九三九年十一月)
- (2) 田村泰次郎『わが文壇青春記』(新潮社 一九六三年三月)
- (3) 坂口安吾『二十七歳』(『新潮』四卷三号 一九四七年三月 八一〜九九頁、『坂口安吾全集 第五卷』(筑摩書房 一九九八年六月)所収)
- (4) 青木正美『古本探偵追跡簿』(マルジュ社 一九九五年一月)
- (5) 紅野敏郎『昭森社(森谷均)の『河田誠一詩集』—河田誠一・草野心平・田村泰次郎・井上友一郎ら』(『国文学 解釈と鑑賞』六十八巻四号 二〇〇三年四月 一二〇〜一二三頁)
- (6) 河田誠一『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年九月)
- (7) 前述の通り、河田に関する研究は多くない。地元の文学者たちの調査もあるが、やはり青木の著作がもつとも網羅的で、本稿第一章におけるこれ以降の節は、おおむね青木正美『古本探偵追跡簿』(前掲注(4))収録「天折詩人・河田誠一追跡」の要約・再構成である。河田について、さらなる詳細を確認されたい場合は、同書及び青木正美『古本市場掘出し奇譚』(日本古書通信社 一九八六年十月)または青木正美『自己中心の文学 日記が語る明治・大正・昭和』(博文館新社 二〇〇八年九月)他を参照されたい。
- (8) 青木正美『古本市場掘出し奇譚』(前掲注(7))
- (9) 河田誠一『河田誠一詩集』(前掲注(6))三二〜三三頁
- (10) 『桜』二巻四号 一九三四年七月 九〇〜九二頁
- (11) 現在の高等学院ではなく、一九一八年の大学令を受けて設置された予科。修了者は無試験で予定の学部に進学した。中学校四年修了者向けの第一高等学院(三年制)と、五年修了者向けの第二高等学院(二年制)があった。
- (12) 田村泰次郎『わが文壇青春記』(前掲注(2)) 一一頁
- (13) 『愛誦』四巻三号 一九二九年三月 七三〜七四頁
- (14) 『愛誦』四巻六号 一九二九年六月 七一〜七二頁。

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

- (15) 『愛誦』 五卷三号 一九三〇年三月 五五頁
- (16) 『愛誦』 五卷十二号 一九三〇年十二月 六八〜六九頁
- (17) 河田の詩には、現在では女性蔑視とされる表現が含まれるが、執筆当時の時代背景を考慮し、そのままとした。
- (18) 『愛誦』 六卷四号 一九三一年四月 七二〜七三頁
- (19) 『愛誦』 六卷六号 一九三一年六月 七八〜七九頁
- (20) 『愛誦』 六卷十号 一九三二年十月 七六〜七七頁
- (21) 紅野敏郎「桜」の河田誠一追悼号と昭森社の『河田誠一詩集』（『國文學 解釈と教材の研究』三十七卷三号 一九九二年三月 一六八〜一六九頁）
- (22) 「芸芸雑誌」桜 発刊 新興派以後の運動新進10氏の結成」（『読売新聞』一九三三年三月二十一日東京朝刊 四頁）
- (23) 田村泰次郎「友よ、やすらかに眠れ——わが悲しき旅日記」（『桜』二卷三号（河田誠一追悼号）一九三四年七月 一一三〜一二八頁）
- (24) 中島直人（一九〇四〜一九四〇）はあまり知られていない作家だが、ハワイ生まれの日系二世で、稲門である。一九一九年に兄の死をきっかけに来日し、早稲田大学英文科に進み、『新早稲田文学』同人となる。同時代には珍しく、ハワイの景色を多く書いた。著書『ハワイ物語』（砂子屋書房、一九三六）の序は川端康成である。本学図書館には自筆資料一点と『ハワイ物語』署名本が所蔵されている。ちなみに『桜』河田追悼号では「河田君と思ひ出の一夜」という文章を寄せている（一一〇〜一一四頁）。「さうだ、次のやうな挿話のあることを忘れてゐた。私はそれを書いてみることにする」と披露される思い出は、ある夜、河田を含む仲間たちと散々飲み、深夜に中島と河田が補導され、留置所で夜を明かし、翌朝、少し高揚しながら二人で帰宅するというもの。なぜ追悼文でこの挿話なのかと思うが、稲門らしいかもしれない。補導の理由は、中島は自ら発した一言故、河田は「どうも生意気に見える」故。中島については、以下の論文に詳しい。日比嘉高「望郷のハワイ二世作家中島直人の文学」（『文学研究論集』二十七号 二〇〇九年二月 一〜二〇頁（二三八〜二九頁））
- (25) 紅野敏郎「桜」の河田誠一追悼号と昭森社の『河田誠一詩集』（前掲注(20)） 一一三頁
- (26) 青木正美「古本市場掘出し奇譚」（前掲注(7)） 二七〇〜二七三頁

- (27) 井上友一郎「昂き人」(『桜』二卷三号(河田誠一追悼号)一九三四年七月 一〇二―一〇五頁)
- (28) 井上友一郎「河田誠一と私」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年九月) 跋四―跋五頁
- (29) 青木正美『古本探偵追跡簿』(前掲注4) 三二〇頁。
- (30) 坂口安吾「愉しい夢の中にて」(『桜』二卷三号(河田誠一追悼号)一九三四年七月 一〇五―一〇七頁)
- (31) 『桜』河田追悼号には、前述の通り、中河与一も追悼文を寄せている(中河与一「河田君のこと」(『桜』二卷三号(河田誠一追悼号)一九三四年七月 一二九頁)。中河は香川出身で、河田にとつては同郷の先輩であった。同追悼文中で、河田と田村のコンビが次のように描写されている。「河田君は毅然としたところのある青年で、それでゐて人ざほりが自然でやさしかった。田村君と一緒にゐると全然違つてゐるのに、よくマツチしてゐて、僕は二人とも好ましかつた」(一二九頁)。ふつくらした田村と、文字通り青白い文学青年だった河田が並んで立てば、確かに「よくマツチ」している気がし、当時の二人の雰囲気伝わってくる。「河田君のやうな天才のある少年を早世せしめた何物かに無限の不平を感じる」(一二九頁)という一文も見える。
- (32) 北原武夫が寄せた追悼文(北原武夫「喪はれた「初恋ひ」」(『桜』二卷三号(河田誠一追悼号)一九三四年七月 一〇七頁)に、河田が自身の名字を「カワダ」と発した描写があり、本稿の英題はそれに倣つた。
- (33) 少し話がそれるが、ここで鮎川信夫と森川義信(一九一八―一九四二)について触れておきたい。森川は河田と同郷であり、かつ夭折した稲門の詩人である。鮎川のもつとも有名な詩の一つ「死んだ男」に登場するMは、彼である。第一次『荒地』に参加し、鮎川とは親友だったが、戦中、ビルマで没した。そして、戦後、鮎川が遺稿詩集を出版する――田村・河田コンビのほとんど再現で、早稲田の杜で邂逅した才能が、結核と戦争という二つの時代的な事象をきっかけに、同じ軌跡を歩いたのである。同様のことは、まだあるだろうと想像する。
- (34) 青木正美『古本探偵追跡簿』(前掲注(4)) 二九二―二九四頁。「憂金桜」中に出てくる「涙」は当該の自筆原稿を確認すると「なみだ」とひらがな表記されている。

二 早稲田大学図書館新収資料・河田誠一資料について

早稲田大学図書館では、二〇二一年に河田誠一の資料一式を入手した。自筆原稿、昭森社『河田誠一詩集』、自筆書簡、雑誌『東京派』などを含む資料群である。前章の通り、今回の資料は青木正美氏の旧蔵資料であると見て間違いない。北川冬彦らが『詩と詩論』を離脱して『詩・現実』を創刊した時代に、河田誠一は田村泰次郎、井上友一郎、坂口安吾らとともに文学活動を行った。そして、夭折したこの稲門詩人の資料は、田村泰次郎の旧蔵を経て、青木の手へ渡った。青木は、「河田は忘れられていい筈はない、忘れさせてはならない³⁵⁾」という思いを強く持ちながら、二十七年という歳月をかけて河田について調べ、その結果を世の中に発表していった。

田村や井上は、戦後、早稲田系の作家を糾合した丹羽文雄の『風雪』『文学者』、および十五日会に参加し、流行作家となつて文壇に名を残したが、これよりはるか以前に没した河田の名が今日残されているとすれば、彼ら同時代の作家の証言、地元香川の文学者たちの保存活動に加えて、青木氏の情熱が実を結んでいることは間違いない。早稲田大学図書館では稲門関連の文学資料を収集しているが、これまで、河田誠一関係の資料は皆無であった。また、公刊された『河田誠一詩集』についても、日本近代詩の一大コレクションである今井卓爾文庫、衣笠詩文庫にも所蔵がなかった。田村泰次郎が保存した資料群が、この度、本学所蔵に至ったのは、ひとえに青木正美氏の情熱によるものであり、この場を借りてあらためて感謝を申し上げたい。

第一章では、河田誠一の詩と生涯について紹介したが、本章では、今回入手した各資料の概要を解説するとともに、資料の全体像について調査した内容を記す。調査にあたっては、先行研究に拠りつつ、新たに初出誌調査、文献調査を行うことで、これを補完した。

今回入手した資料群は、以下のように大別することができる。

- ・詩集『河田誠一詩集』（昭森社、一九四〇年（昭和一五）刊）一冊
- ・作品原稿 五十点
- ・日記帳 一冊（一九二七年（昭和二）自一月一日 至六月十六日）
- ・作文 四点
- ・書簡 七点（河田誠一書簡五点、海本清子書簡一点、河田徳一書簡一点）
- ・雑誌『東京派』 二冊（三号〓一九三一年四月、四号〓一九三一年六月）

以下、第一節より第六節では、右に挙げた六つの資料区分ごとに詳細を述べる。なお、入手した資料群には、このほか、田村泰次郎旧蔵と思われる河田作品掲載誌の切り抜き、および青木が河田誠一を調査するにあたって苦勞して収集したと思われる資料類が含まれている。

- (一) 詩集『河田誠一詩集』（昭森社、一九四〇年（昭和一五）刊）一冊
- 一九四〇年九月二十五日印刷、一九四〇年九月三十日発行、頒価金三円
- 著者・河田誠一、装幀・草野心平
- 発行者・森谷均、印刷者・近藤龜助、発行所・昭森社

河田の死後、田村泰次郎、井上友一郎、草野心平らによって刊行された、唯一の公刊詩集である。装幀は草野心平。跋文は、田村泰次郎「河田誠一の詩」、および、井上友一郎「河田誠一と私」。

青木正美の各著作の他では、紅野敏郎がこの詩集を詳しく紹介しており、紅野は「入手出来た日の喜びはいまだに忘れられない」「函にも表紙にも、扉にも用いられた心平の「河田誠一詩集」という雄渾な字、表紙に各種の時計の意匠を効果的に散らばし、見返しはこげ茶と水色のうねった幾重もの波を思わす力強さにあふれたもので、無名に近い存在だった河田にとっては思わず快哉を叫びたいような造本にしたてあげられている」と述べるとともに、「このようなみごとな造本、草野心平の題箋、装幀の『河田誠一詩集』として世に送り出されたことの真の動因はどこに潜んでいたのでしょうか。やはり森谷均の義侠心が第一と私は見たい」として、現代詩出版を支えた森谷均と、昭森社の理解へと読者を誘っていく。⁽³⁶⁾

詩集の発行と草野心平の関与

紅野は「『草野心平』がどうして全力を尽くしてその造本に力を貸したのか」と疑問を呈しているが、井上友一郎が「詩集は『放浪詩篇』と題する河田のノートから選ばれたが、これは南京政府宣伝部に赴任直前の忙しい草野心平が、特に私たちのために骨折って下さった。装幀もやはり草野氏にお願いした」と述べている通り、草野心平は装幀のみならず、詩集の編纂そのものに深く関わっていた。田村泰次郎の回想によれば、少なくとも一九三六年の時点で田村と草野の間にはかなり親密な交流があった。⁽³⁹⁾ また、草野が主宰した『歷程』の第四号（一九三六年十月）には、河田の遺稿として「残雪」が掲載されており、田村は、同号において「『歷程』の友人たちの行為で、彼の詩の幾つかが発表出来ることは私の泣きたいやうな喜びである」と述べている。⁽⁴⁰⁾ 『歷程』同人では、草野とともに田村が交流を

持った逸見猶吉、『桜』同人でもあり、河田の追悼文で「河田の葬合戦(とちん)をするのは誰であろうか」と語った菱山修三などがいた。草野心平が本詩集に関与した経緯は、このような交流の中から生まれたものと考えられる。⁽⁴²⁾

三重県立図書館田村泰次郎文庫には、詩集編纂の経緯を伝える井上友一郎の書簡が残されている。関連する箇所を以下に引用する。引用中、不明箇所は□で表し、推測箇所は〔 〕で囲って示した。

河田の遺稿集は、小生の跋も書きました。草野氏の都合よければ、先方(出版社)に逢ふばかりになってゐます。金はアブナイので全部能勢君に保管してゐて貰つてゐます。近いうちに能勢君と小生二人で草野氏に逢ひ、先方に逢ふことになります。どうかご安心ください。

(井上友一郎書簡抜粋 田村泰次郎宛 封書 一九四〇年五月八日 三重県立図書館田村泰次郎文庫所蔵)

河田の本、近く出ると思ひます。草野氏に今日も一寸逢つて打ち合わせしました。草野といへば、彼氏、七月上旬頃南京へ就職のため渡支するさうです。当分逢へなくなるわけですが、一つ壮行会のやうなものやらうと思つてゐます。

(井上友一郎書簡抜粋 田村泰次郎宛 封書 一九四〇年六月十日 三重県立図書館田村泰次郎文庫所蔵)

田村泰次郎は一九四〇年五月に陸軍に応召され、東京を離れて、三重県久居三十三連隊で三ヶ月の軍事訓練中であつた。右二書簡の宛先は、いずれもこの久居三十三連隊である。田村は東京を離れたために詩集発刊の実務に携われず、残つた井上、能勢馨、草野心平らが中心となつて一九四〇年九月三十日の詩集発刊の日を迎えたことが分かる。

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

詩集の刊行から頒布までの経緯

田村や井上の悲願叶って発刊された『河田誠一詩集』であったが、販売も含めて、この詩集が世に出たのは、発行後一年程経った一九四一年七月以降であった。井上友一郎は、一九四一年九月号の『現代文学』で、「実を云ふと、この詩集は、昨年十月に本になってはゐたが、しかし、ある事情から極めて最近生前の先輩知己に贈られ、公にされた訳なのである」と述べている。河田誠一を早くから紹介した小説家、佐々木正夫もまた、中村猛という作家の証言として、「出版してから半年あまり河田家に保存してあったが、翌年の七月、先輩や友人作家や新聞社などに贈呈されている」と伝えている。⁽⁴⁴⁾

発刊された詩集を「先輩知己」に寄贈する、ということ自体は、以前から田村、井上、能勢らの間で決められていたようである。しかしながら、右の通り発刊された詩集は翌一九四一年になっても、世に出ることはなかった。三重で軍事訓練中であった田村は、四月に入つて、早稲田大学仏文科の先輩西川満から受け取った書簡の中で、このことを知ることとなる。

河田誠一はどうされたかと思つてみました、すでに故人になられた由、あのころのことを思ふことしきりで、す、御骨折で昭森社から詩集ができましたさうで何よりでした。昭森社の森谷氏はあったことはありませんが本の〔序〕のことで時折り文通もありました。今でも何かと単行本を私宛に送つてくれますが河田君の詩集は遂に知らずじまいでした。おそらく部数も少なかったのかと思ひます

もし昭森社に在庫もして居れば頼んでやれば送つてくれるかと思ひますが、大兄の方からのと二重になるといけませんから、ひかへて置きます。弟さんからはお言葉の如く何も送つてまゐりません

(西川満書簡抜粹 田村泰次郎宛 封書 一九四一年四月七日 三重県立図書館田村泰次郎文庫所蔵)

おそらくこのことについて田村から井上に問い合わせがあったようで、込み入った事情によってまだ頒布することができないことを説明する井上の書簡が存在する。同書簡によれば、刊行された詩集は全て、昭森社から河田家に送付され、そこで頒布を待つ状態にあった、とのことである。同書簡では、頒布に至らない事情が説明される一方、次の通り、頒布先の選定を井上が進める旨、述べられている。

しかし、寄贈のアドレスは、今から準備しておいても差し支へありませんから、小生折をみて、お母さんの手許まで送っておかうとは考へてゐます。それについて、特に貴兄も、御心付きの寄贈者があれば、一寸御一報おき下さいませんか。小生充分考へて、手落ちなく選定する考へですが、貴兄もぜひ□してならぬ人、(そして小生の忘れそうな人) あらば一寸御知らせおき願います。

(井上友一郎書簡抜粹 田村泰次郎宛 封書(封なし) 一九四一年五月十五日 抜粹 三重県立図書館田村泰次郎文庫所蔵)

このように、出版後、詩集は河田家に所蔵されて世に出るのを待つ状態にあった。そして、一九四一年七月十六日付の井上の書簡で、ようやく寄贈の話がまとまった旨、述べられている。書簡中に出てくる「徳一」は河田誠一の弟、河田徳一(一九一三〜一九四三)である。

徳一さんの田舎の友人と相談の上、徳一さんのお母さんにも諒解を得た上で、詩集は、昭森社の手で寄贈するこ

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

としました。(中略)今度とにかくも寄贈する処まで漕ぎ付けました。

(井上友一郎書簡抜粋 田村泰次郎宛 封書(封なし)一九四一年七月十六日 三重県立図書館田村泰次郎文庫所蔵)

右書簡に「昭森社の手で寄贈」とある通り、一度昭森社から河田家に送付された詩集は、再び昭森社に返送され、そこから寄贈に至ったようである。河田誠一の母マスノから田村泰次郎に宛てた書簡(三重県立図書館田村泰次郎文庫所蔵 封書(封なし) 日付不明)には、詩集を河田の実家から東京へ送付したこと、井上が関係者に頒布することが語られており、ここからも、この経緯を伺うことができる。

詩集が頒布された翌一九四二年二月号の『新技術』に出稿した昭森社の広告では、北園克衛『火の堇』、草野心平『富士山』(刊行予定)、佐藤一英『空海頌』、左川ちか『左川ちか詩集』などに並び、『河田誠一詩集』が紹介されている。

詩集の発行部数と頒布先

この詩集については、佐々木正夫が「限定百部の発行」であることを伝えている。⁽⁴⁵⁾これについては青木の指摘の通り、「寄贈分を別として百部を販売用にした」可能性もあり、はっきりとしなかったが、今回の調査によって発行部数が百部であること、六十部が井上選定の諸氏に寄贈されたこと、二十部が河田家に寄贈されたこと、残り二十部が井上の手もとに残され、販売や追加寄贈に使われるとともに、田村へもこの二十部から頒布されたことが明らかとなった。

百冊のうち、七十五冊を寄贈に任されましたが、六十氏を選定、(十五冊を予備に保管して) 発送されると思ひます。つまり十五冊は、あとで重要な人を思ひ付いた場合の用意です。小生随分抜かりなく六十氏を選んだつもりですが、もし貴兄にて小生の忘れてゐさうな人物思ひ付かれたら、御ついでにご一報ください。

(井上友一郎書簡抜粹 田村泰次郎宛 封書(封なし) 一九四一年七月十六日 三重県立図書館田村泰次郎文庫所蔵)

さて前便にても一寸御知らせしておりました如く河田誠一詩集は、とにかく百冊のうち、二十冊を御家族方へ、六十冊を各方面寄贈、あとの二十冊は念のため小生方に預かってゐます。気が付けば次々と寄贈の予定です。

(井上友一郎書簡抜粹 田村泰次郎宛 封書(封なし) 一九四一年月日不明 三重県立図書館田村泰次郎文庫所蔵)

さて、河田誠一詩集は、吉村鉄太郎、逸見猶吉にもすでに最初に送つてあります。その後、チョイ／＼気が付けば送つてゐます。貴兄の分も、勿論小生の手もとに送らず保存しておきます。

(井上友一郎書簡抜粹 田村泰次郎宛 封書(封なし) 一九四一年九月六日 三重県立図書館田村泰次郎文庫所蔵)

右に見る通り、当初六十冊の贈呈先は井上が選定した。これについては、「河田誠一詩集―寄贈名簿」と題したメモに残されていたと言ふ(以下、「寄贈名簿」とする)⁽¹⁶⁾。

「寄贈名簿」によれば、六十冊のうち、四十二冊は個人宛、十八冊は出版社宛である。このうち、個人の宛先は次に掲げる通りで、『東京派』『桜』『歷程』の同人や、早稲田系の同時代作家、先輩作家、その他、田村、河田、井上らが関わりを持ったと思われる作家や編集者の名が並ぶ。⁽¹⁷⁾

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

能勢馨、隱岐和一（沖和一）、石川利光、和木清三郎、北原武夫、菱山修三、坂口安吾、秋田滋、真杉静枝、大島敬司、矢崎弾、矢田津世子、保高德藏、神西清、加宮貴一、石川達三、丹羽文雄、横光利一、川端康成、春山行夫、西條八十、田辺茂一、中河与一、長谷川己之吉、百田宗治、龍胆寺雄、永山三郎、大島博光、宮川健一郎、安西冬衛、吉村鉄太郎、逸見猶吉、牧野英二、笹本実、井伏鱒二、伊藤整、岩佐東一郎、遠藤正雄、荒木精之、草野心平、十返一（肇）、吉野治夫

詩集の草稿——「放浪詩篇ノート」と『夏の終り』

前述の通り、井上は「詩集は「放浪詩篇」と題する河田のノートから選ばれた」と述べている。このノートについて田村は、「翌五年の春、彼は帰省中ある女の人の事情から腐りきって、四国放浪の旅に上った。——この旅行が、彼にとってどんなに苦痛に満ちた長い暗いものであったかは、旅の途上自分の肉体に入墨をするやうにして行く先々で書きつけた「放浪詩篇」と題する、いま私の手元にあるみずばらしい一冊のノートが語ってゐる」と述べている。これらのことから、一九三〇年（昭和五）春頃に編纂された「放浪詩篇」なる詩稿ノート（以降、「放浪詩篇ノート」とする）が存在したこと、そしてそのノートが『河田誠一詩集』の草稿となったことが分かる。

一方、青木は、この『河田誠一詩集』と別に、未発表の肉筆詩集『夏の終り』を所蔵している。青木は、自著にて、「この詩集は、河田が残した反故の中の唯一現状をとどめた肉筆の詩集で、一九三〇年五月版」とあり、満十九歳の時のものである」と紹介するとともに、その全文を掲載している。残念ながら今回の収蔵資料にこの肉筆詩集は含まれておらず、現物を確認できていない。しかし、青木の著書をもとに『夏の終り』と『河田誠一詩集』を照合したところ、『河田誠一詩集』収録二十二作品中、十六作品は、『夏の終り』にも収録されており、『夏の終り』の収録作品

数は四十八作品で、『河田誠一詩集』よりも多かつた。この結果を見ると、『夏の終り』は『河田誠一詩集』の草稿であるように見える。

ここで疑問となってくるのは、「放浪詩篇ノート」と『夏の終り』の関係である。井上は『河田誠一詩集』は「放浪詩篇ノート」を元に編纂されたと語っている。一方で、両者の収録作品の重なりをもとに考えれば『夏の終り』もまた、『河田誠一詩集』と関係の深い草稿であると言える。さらに、『夏の終り』は一九三〇年五月編纂、「放浪詩篇ノート」は一九三〇年春執筆であるから、両者の制作時期も非常に近い。「放浪詩篇ノート」が『夏の終り』、『河田誠一詩集』両者の草稿であるのか、あるいは「放浪詩篇ノート」が『夏の終り』として再編されたのか、あるいはまた、『夏の終り』が「放浪詩篇ノート」そのものなのか。いずれにせよ、両者の間に何らかの関係があることが予想される。これについては、今後の課題としたい。

なお、『東京派』創刊号（一九三〇年十二月）には「来春、河田の詩集が出るはずである」との予告が見え、同六号（一九三一年十一月）には『侯鳥』という詩集の刊行予定が掲載されている。この際は詩集発刊に至っていないが、一九三〇年後半以降、河田が処女詩集発刊の準備を重ねていたことが伺える。

『河田誠一詩集』諸本の来歴について

この度、早稲田大学図書館蔵書に加えられたのはこれまで述べてきた通り、青木正美旧蔵書であり、青木は一九八一年にこの詩集を入手している⁵⁰。署名、書き込み等はなく、旧蔵者は不明である。

早稲田大学図書館蔵書を除いて、現在確認できる所蔵機関は、三重県立図書館、神奈川県立文学館、堺市立図書館、香川県立観音寺第一高等学校、国立国会図書館、東京都立図書館所蔵の六箇所である。三重県立図書館には二冊が所

蔵されており、早稲田大学図書館蔵書を加えると、八冊が何らかの機関に所蔵されていることとなる。

三重県立図書館蔵書は一九九三年に同館に寄贈された田村泰次郎旧蔵書、現在の田村泰次郎文庫蔵書であり、田村と河田の交流は前述の通りであつて、ここでは詳説を要しない。所蔵は同館発行の田村泰次郎文庫目録⁽⁵¹⁾で確認できるが、同館に伺つたところ、所蔵は二冊とのことであつた。

神奈川近代文学館蔵書はウェブの蔵書目録に西條八十文庫とある。西條八十は「寄贈名簿」記載の一人であり、河田が地元香川時代から作品を投稿し続けた『愛誦』の主筆者であつた。一九二九年に上京した河田は早稲田大学第二高等学院に進学するとすぐに、早稲田の仏文科教授であつた西條八十のもとを訪れている⁽⁵²⁾。途半ばにして夭折した教え子の遺稿詩集を、西條はどのような思いで受け取つたか、少なくとも生涯この詩人の手元に置かれ、現在、神奈川近代文学館に所蔵されている。

堺市立図書館蔵書については、同館安西文庫の冊子体目録を確認したところ記載があり、⁽⁵³⁾「寄贈名簿」記載の一人であるモダンリズム詩人、安西冬衛の旧蔵書であることが判明した。後述の通り、安西は『東京派』に寄稿しており、この時代からの交流が認められる。

香川県立観音寺第一高等学校蔵書は、ウェブの目録から、同校の「先輩文庫」に所蔵されていることが分かる。同校は河田の出身校であり、また、同校の教員を務めた文学者、剣持雅舟（野口雅澄）は河田誠一の研究者でもある関連などから、この文庫に河田の詩集が収められていると考えられる。

国立国会図書館蔵書については、所蔵印を調査したところ、内務省納本後に帝国図書館に移管された内務省交付本であることが判明した⁽⁵⁴⁾。なお、国立国会図書館蔵書については、図書館向けデジタル化資料送信サービス対象資料となつており、同サービスに参加している公共図書館や大学図書館などで閲覧することが可能である⁽⁵⁵⁾。

東京都立図書館蔵書については、本稿の調査によって、井上友一郎旧蔵書であることが判明したが、この経緯は少々入り組んでいる。同書の蔵書印を確認していくと、もともと一九五二年九月に杉並区立図書館が受贈、その後一九七五年九月に東京都立図書館に移管されることが分かる。杉並区立図書館への寄贈者名は「新居格記念会」であるが、見返しの「井上友一郎氏寄贈 新居格文庫」という角印から、実際に資料を寄贈したのは井上友一郎であることが分かる。⁽⁵⁶⁾新居格記念会とは、新居格没後の一九五一年十二月に発足した文化団体であり、新居格の蔵書だけでなく、「故人の蔵書に加えて全国文化関係者からの寄贈を求め、今春四月竣工の区立図書館内に「新居格記念文庫」を創設⁽⁵⁸⁾」した。「井上友一郎氏寄贈 新居格文庫」との印は、この際に「文化関係者からの寄贈」として、井上友一郎が『河田誠一詩集』を寄贈したことを意味することになる。

井上は前述の通り、『河田誠一詩集』の寄贈に関わった際、追加寄贈の予備として二十冊を手元に残した。東京都立図書館本は、ここから一冊を寄贈したものである。いずれにせよ、詩集刊行後十年を経て、河田の詩集を後世に残そうとした井上が、新居格記念会の活動を契機として、杉並区立図書館に寄贈したことが分かる。新居格は『桜』にも寄稿しており、井上としても文学仲間の意識あつてのことだっただろう。なお、一九七五年に杉並区立図書館から東京都立図書館に移管された経緯については、杉並区立図書館、東京都立図書館に問い合わせを行ったが、正確には分からなかった。

収録作品一覧

収録作品の一覧については、第三章「河田誠一作品年譜」を参照。『夏の終り』との対照も併せて作品年譜の章に記載した。初出調査を行ったところ、「残雪」が『歷程』四号（一九三六年十月）に遺稿として田村泰次郎の追悼文と

ともに掲載されたこと、「春」が『愛誦』五巻四号（一九三〇年四月）初出、「春の港」が『愛誦』四巻七号（一九二九年七月）初出であること、この三点しか確認が取れなかった。このことからやはり、未発表詩稿を中心としてこの詩集が編纂されたことが分かる。

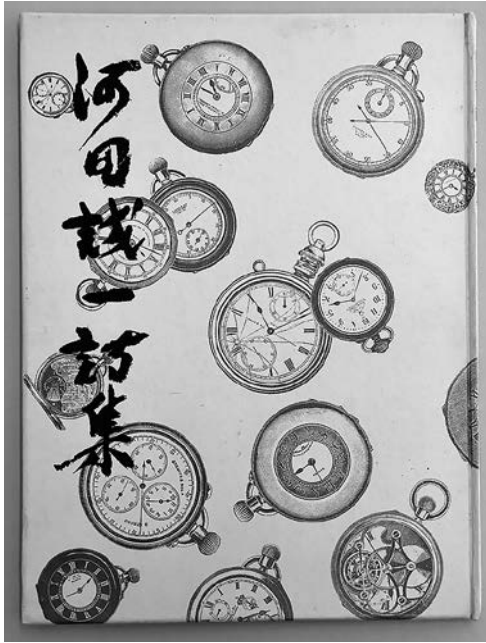


図1 『河田誠一詩集』表紙

(二) 作品原稿 五十点

この度早稲田大学図書館が入手した作品原稿は五十点、原稿枚数は、二百字詰原稿用紙九十一枚、四百字詰原稿用

紙百枚、計百九十四枚に上る。

以下、各原稿の詳細を掲げる。

〈凡例〉

・次の形式で、一行一原稿の情報を記載する。

連番「作品名」《作品種別》原稿種別 原稿枚数 ファイル番号 初出・備考

・連番 …… 本稿で便宜上付与した連番。

・作品名 …… 原稿に記載された作品名。作品名の記載がないものは（無題）と記載し、備考欄に書き出しを記載した。

・作品種別 …… 詩、小説などの作品種別。

・原稿種別 …… 今回入手した原稿は、左記の十三種類の原稿が使用されていた。これらの種別を左記の丸付き数字で記載した。

① 二〇字×一〇行・二百字詰原稿用紙。

② 二〇字×二〇行・四百字詰原稿用紙。欄外下に「10×20」

③ 二〇字×二〇行・四百字詰原稿用紙。「三省堂特製」。

④ 二〇字×二〇行・四百字詰原稿用紙。「三省堂原稿紙」。

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

- ⑤ 二〇字×一〇行・二百字詰原稿用紙。欄外下に「10…20…200」
 - ⑥ 二〇字×二〇行・四百字詰原稿用紙。「白木屋製」。
 - ⑦ 二〇字×二〇行・四百字詰原稿用紙。欄外左に「十行 二十字詰」
 - ⑧ 二〇字×二〇行・四百字詰原稿用紙。「新月原稿用紙」。
 - ⑨ 二〇字×二〇行・四百字詰原稿用紙。「第二早高雑誌部原稿用紙」。
 - ⑩ 二〇字×二〇行・四百字詰原稿用紙。欄外左に「10×20」
 - ⑪ 二〇字×二〇行・四百字詰原稿用紙。欄外下に「20×20」
 - ⑫ 二〇字×二〇行・四百字詰原稿用紙。
 - ⑬ 二〇字×二〇行・四百字詰原稿用紙。欄外左に「早稲田 中屋製」
- ・原稿枚数

・ファイル番号 …… 早稲田大学図書館が一連の河田誠一資料を入手した際、作品原稿の大半は透明ポケット付きのクリアファイルに収められていた。クリアファイルの表題は左記の通り。これらの種別を左記のアルファベットで記載した。

- (A) 河田誠一資料 遺稿詩集 生前編集詩20篇
- (B) 河田誠一資料 カンナの驛 原稿他
- (C) 題無し(クリアケース入り原稿1枚「肉体を哭く」)
- (D) 河田誠一資料 雲・K子へおくる手紙 原稿
- (E) 河田誠一資料 廢港の街 原稿 他

(F) 河田誠一資料公園にて 原稿他

・初出・備考 …… 初出が判明したものは、初出を記載した。青木正美『古本探偵追跡簿』（前掲）で紹介されている場合は「古本探偵」で活字化」と記載した。また、その他備考がある場合はここに記載した。

【原稿一覧】

- 1 「映像（いまあじゆ）」《詩》①2枚（A）『愛誦』五卷五号（一九三〇年五月）
- 2 「月光の中に」《詩》①2枚（A）『愛誦』四卷三号（一九二九年三月）
- 3 「春」《詩》①1枚（A）『愛誦』五卷四号（一九三〇年四月）
- 4 「初夏のうれひ」《詩》①2枚（A）『愛誦』二卷九号（一九二七年九月）
- 5 「青い空」《詩》①3枚（A）『愛誦』三卷一号（一九二八年一月）
- 6 「海浜牧歌」《詩》①4枚（A）『愛誦』四卷十一号（一九二九年十一月）
- 7 「航海」《詩》①3枚（A）『愛誦』五卷二号（一九三〇年二月）
- 8 「春の港」《詩》①3枚（A）『愛誦』四卷七号（一九二九年七月）
- 9 「ある印象」《詩》①2枚（A）『愛誦』四卷五号（一九二九年五月）
- 10 「サンパンの春」《詩》①4枚（A）『愛誦』四卷六号（一九二九年六月）
- 11 「秋かぜの賦」《詩》①3枚（A）『愛誦』四卷一号（一九二九年一月）
- 12 「海辺の町」《詩》①4枚（A）『愛誦』四卷九号（一九二九年九月）
- 13 「秋の犬」《詩》①4枚（A）

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

- 14 「亡春」《詩》①7枚(A)
- 15 「虫歯と白い月」《詩》①2枚(A)
- 16 「春」と深夜」《詩》①3枚(A)
- 17 「白氷の扉」《詩》①4枚(A) 『愛誦』五卷三号(一九三〇年三月)
- 18 「病床月前の賦」《詩》①2枚(A) 『愛誦』三卷八号(一九二八年八月)
- 19 「生存の灯」《詩》①2枚(A) 『愛誦』三卷四号(一九二八年四月、初出タイトル「生存の灯影」)
- 20 「生きてゆくと云ふトンネル」《詩》①3枚(A) 『愛誦』四卷二号(一九二九年二月、初出タイトル「生きてゆくと云ふトンネル」)
- 21 「火群」《詩》②1枚(B)
- 22 (無題)《詩》②1枚(B) 書き出し「かもめ啼く日の汐風に」
- 23 「沖風の日に」《詩》②1枚(B)
- 24 「鼻血のある□」《詩》②1枚(B) ※□は滲みのため判別不能
- 25 「雲と河」《散文》②2枚(B)
- 26 「非情」《詩》③1枚(B) 「非情」「憂金桜」は一枚の原稿用紙の左右に記載) ※『古本探偵』で活字化、『近代詩人・歌人自筆原稿集』で原稿写真掲載。⁵⁹⁾
- 27 「憂金桜」《詩》③1枚(B) 「非情」「憂金桜」は一枚の原稿用紙の左右に記載) ※『古本探偵』で活字化
- 28 「晴日―火薬庫跡風景雑話―」《散文》④2枚(B)
- 29 「花」《詩》⑤1枚(B)

- 30 「白氷の扉」《詩》⑥1枚 (B) 『愛誦』五卷三号(一九三〇年三月) ※17と同一作品
- 31 「病床一夜」《詩》⑥1枚 (B)
- 32 「花のある葡萄畑 仏(シユウリイ・ブリウドム)」《訳詩》⑥1枚 (B)
- 33 「亡春―その五―」《詩》①1枚 (B)
- 34 「海の風景」《詩》①3枚 (B)
- 35 「哭く―早大ラメナド同人の決別―」《短歌十四首》⑦2枚 (B)
- 36 「カンナの駅」《小説》⑤13枚 (B)
- 37 (無題)《小説》⑤6枚 (B) ※書き出し「昭和二年七月のことであった」
- 38 「カンナの駅」《小説》⑤5枚 (B)
- 39 「森林(長篇「山雀」の二)」《小説》⑤1枚 (B)
- 40 「地獄へ」《不明》⑤1枚 (B) ※題のみ
- 41 (無題)《評論》⑧2枚 (B) ※書き出し「最近、ヂェムズ・ヂョイス氏が日本に喧伝せられてより」
- 42 「雨降る、春や春、雨」《評論》⑧2枚 (B) ※1枚は原稿用紙裏面に記載
- 43 「生き延びる力」《散文》④3枚 (B) ※末尾に「一九三三、一、十□」(□は判別不能)、『古本探偵』で活字化
- 44 「肉体を哭く」《詩》⑥1枚 (C)
- 45 「雲(アブル)」《小説》⑨18枚 (D) ※15〜18枚目は没原稿の裏書
- 46 「K子へおくる手紙」《小説》⑩7枚 (D) ※『古本探偵』で活字化
- 47 (無題)《散文》⑦2枚 (D) ※書き出し「論的世界観を支持し奉ずる浅原氏よ」、末尾に「一九三〇、五」

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

48 「(長篇) 廃港の街―自叙伝―」《散文》⑪(1～11枚目)・⑩(12～24枚目) 24枚(E) ※『古本探偵』で一部活字化

49 「公園にて(長篇)「山雀」の二」《小説》⑫19枚(F) ※『古本探偵』で活字化

50 「ある終焉」《小説》⑬11枚(F)

青木の著書⁽⁶⁰⁾でその存在と本文が紹介されている「人生の断面―ある人生論」なる原稿は、今回入手した資料群に含まれていない。また、前述の通り、『夏の終り』収載四十八篇も今回の資料群には含まれていない。『夏の終り』収載作品名は以下の通りである。このうち、「風塵の故郷 放浪詩篇その二二」については、『近代詩人・歌人自筆原稿集』で原稿の写真を⁽⁶¹⁾見ることができる。

春／茫茫とした野原にゐる／化石／生活詩一篇／軍艦燃ゆ―秋山紅村君の死に―／炎天／哭く／短唱／悲しき祝祭／花のなき家／雨天の／杜の夏／モデルになって書いた詩／残雪／靴／訣別詩／生田春月の死／クサ／オイ／石灰／新しき恋／蟻／過ぎゆく日／肖像／さくら花／人間の心／鼻血／糞／夏／経過／悪人―自殺に就ての七―
／レエニンの伝説／地獄／鯉／友よ／花屑／初めての日／さくら花 ―2―／南方哀別日日／病愛／妬心／燃ゆる村落 放浪詩篇その一／風塵の故郷 放浪詩篇その二／碧潭―国境へ―／雨天の／哀史／病愛再説／江戸菊

以下に、何点か、原稿の図版を掲載する。

図2は50「ある終焉」《小説》原稿である。青木は、この原稿について、早稲田大学第二高等学院在学时、西川満が主宰する『羅女奈土』⁽⁶²⁾に寄稿しようとしたものではないかと述べている。実は、「早稲田 中屋製」とあるこの原

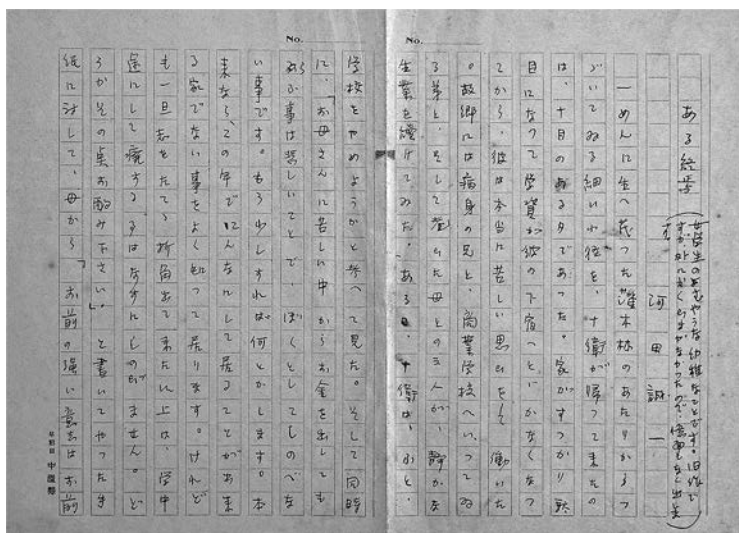


図2 50「ある終焉」《小説》原稿

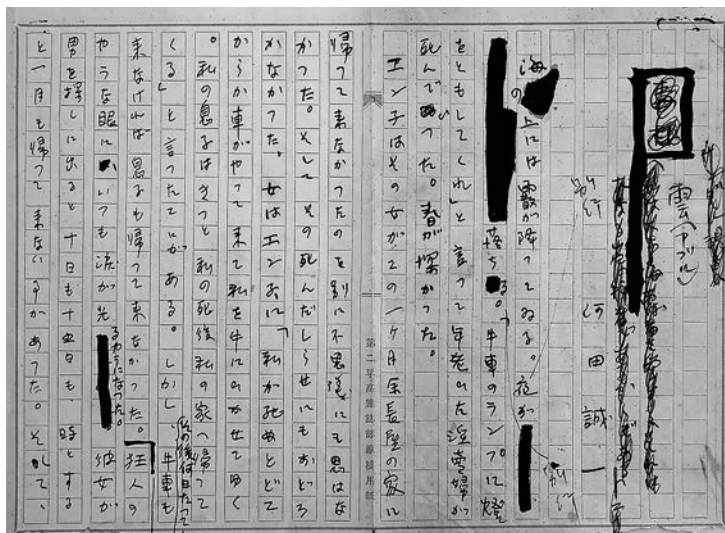


図3 45「雲 (アブル)」《小説》原稿

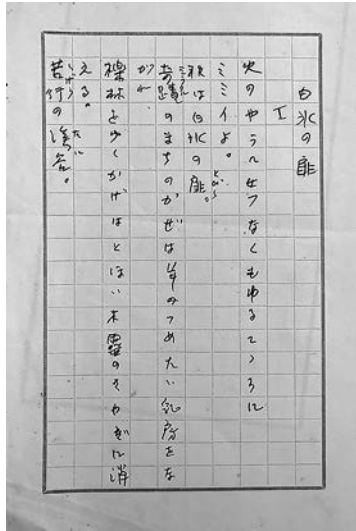


図4 17「白水の扉」《詩》原稿

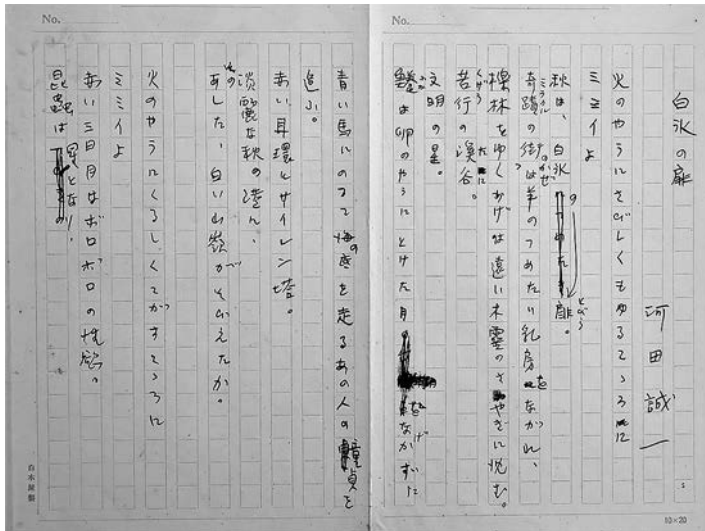


図5 30「白水の扉」《詩》原稿

稿用紙(㊸)は、今回調査で発見した『羅女奈土』に使用されているものと同一であり(第一章で触れた通り、『羅女奈土』は、原稿用紙そのものを綴じて作成された雑誌である)、青木の推測をさらに裏付けると言える。

図3は45「雲(アブル)」「小説」原稿である。野に「第二早高雑誌部原稿用紙」(㊹)とあり、今回の収蔵資料のうち、同原稿が使用されたのはこの作品のみである。

図4は17「白氷の扉」《詩》原稿、図5は30「白氷の扉」《詩》である。この詩は『愛誦』五卷三号(一九三〇年三月)に掲載された。両原稿を比較すると、推敲の跡を追うことが出来、例えば四行目の結びは17が「木霊のさやぎに消える」であるのに対し、30は「木霊のさやぎに沈む」となっている。さらに、『愛誦』掲載と比較するとこの部分は「木霊のさやぎに消える」である。他の箇所も同様に検証していくと、17のほうが30より後に作成された原稿であり、完成稿に近いことが推測できる。17に使用された原稿用紙は二百字詰のもの(㊺)で、今回の収蔵資料のうち、この用紙に書かれた作品はほとんどが『愛誦』に掲載されているが、他の作品においても、掲載誌と原稿の間には漢字の開きや読点の有無といった異同が見られる。『愛誦』の投稿規定を確認すると、原稿は返却しないとあるので、今回の収蔵資料が『愛誦』の投稿原稿そのものではなく、その下書きである可能性も考えられる。なお、『愛誦』と『河田誠一詩集』の間にも読点や漢字の開きの異同があり、『河田誠一詩集』の成立を考える上で興味深い。

(三) 日記帳 一冊(自昭和二年一月一日、至昭和二年六月十六日)

新潮社『大正十六年新文藝日記』に記載された河田の自筆日記帳。ハトロン紙の上から大きく赤字で「河田誠一日記」と記載がある。青木の次の記録の通りである。「ある時私は詩稿の中に、半年ほどやめてしまった、どうやら河田のものらしい古い一冊の日記帳(『大正十六年新文芸日記』)を見つけた。昭和二(一九二七)年元旦から

六月十六日までのものである。香川県立三豊中学校へ通ったとき（三月まで三年生、四月より四年生）の、河田誠一五歳（数えの十七歳）のものである⁽⁶³⁾」

日記帳のうち、記載がある日付は以下の三十二日分である。

一月一日―一月十五日、一月二十三日、二月二日―二月六日、五月二日―五月五日、
六月十日―六月十六日

青木は、著書でこの日記の一部を活字に起こし、読者に提供している。青木が活字に起こしたのは以下の十三日分である。⁽⁶⁴⁾

一月一日、一月六日、一月七日、十五日、一月二十三日、二月四日―二月六日、

五月三日、六月十日―六月十二日、六月十六日

また、この日記帳にある「懸賞短歌用紙」欄に、応募しようとしたものか、二首の短歌が記されている。

なお、この日記帳の中には、『桜』同人による「文芸講演と舞踊・映画の夕」（於朝日講堂、桜の会主催）のチケットが挟まれていた。開催日付は「五月十日」である。これについては、青木が『日本近代文学大事典』（日本近代文学館編）によれば、「桜」同人が朝日講堂で同人を講師として文芸講演会を開いたのはこの年（※筆者注・昭和九年）の六月一日とある。すでに紹介してある河田の書簡によると、「この間の講演会は実際盛況で……」とあるが、手紙の発信は五月二十八日であり、事典も中々あてにならない⁽⁶⁵⁾と指摘している。本資料によれば、この日付は「一九三四年（昭和九）五月十日」ということになる。

(四) 作文 四点

香川県立三豊中学校在学時に河田が書いた自筆作文四点。題は次の通り。

趣味

追憶、其他

余之愛読書(主として文学に就て)

春(断片)

いずれも、「香川県立三豊中学校生徒用」と中央に記載された二十五字×二十四行の六〇〇字詰原稿用紙に記載されており、「五ノ二 河田 誠一」との署名がある。教員のものと思われる赤字の丸、二重丸の書き込みがあり、「趣味」「追憶、其他」についてはやはり赤字で、教員によると思われるコメントが記されている。青木は、このうち「趣味」「追憶、其他」「春(断片)」の三点を、著書で活字に起こしている(教員コメントは除く)⁶⁶。

(五) 書簡 七点(河田誠一書簡五点、海本清子書簡一点、河田徳一書簡一点)

河田誠一の書簡、海本清子の書簡、弟河田徳一の書簡が、前述の「河田誠一資料 母宛書簡等」のクリアファイルに収められている。

まず、河田誠一書簡は、次の五点である。

河田ますの宛(一九三二年十一月)

河田ますの宛(一九三三年五月二十八日)

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

河田ますの宛（一九三三年八月七日）

塩田了宛（書簡下書）

能勢馨宛（書簡下書）

前三者、母河田ますの宛書簡については、いずれも青木が発見し、晩年の河田の貧困と、作品のモチーフとなった清子について明らかにした資料である。全文は青木の著書で活字化され、読むことが可能である。⁶⁷ 青木は一九三三年八月七日付について二枚欠落があるとしているが、今回の資料も同じ箇所が二枚欠落している。

後二者、塩田了宛および能勢馨宛について、本稿では「書簡下書き」としたが、二〇字×二〇行の四〇〇字詰原稿用紙に記載されており、封筒などは付属していない。書きなぐるような筆致であるが、内容を読むと書簡であることが分かり、ここから下書きと推定した。

塩田了は河田の同郷で、『東京派』一号から五号までの表紙を務めている。能勢馨は『東京派』の同人で、神絢名義で執筆をしつつ、能勢馨名義で編集者兼発行者を務めた。『河田誠一詩集』発行にも深く関わり、後に東宝映画株式会社に入社した。

執筆時期であるが、塩田了宛については、末尾の日付が明確に判読できないのが残念であるが、文中に、「清子との問題が再発した。僕はまたこの醜い女を愛さねばならないのであらうか」とあり、これは一九三二年春に仁尾に帰郷した際の再会を指しているのではないかと推察される。能勢馨宛については、文中に「東京派」のために、君は、必ず「マルドロオルの唄」「俺人の錬金術」を早く完成せよ」とあるが、能勢が『東京派』に「マルドロオルの唄」の翻訳を発表したのは一九三一年六月号（第四号）である。『東京派』は一九三〇年十二月創刊だが、「俺は君の旅に

出てゐる間に帰京する事になるに違いない」との一文を併せ読むと、やはりこの書簡もまた、一九三一年春帰郷時の筆ではないかと推察できる。

塩田了宛の下書きについては旧友ということもあり一般的な書簡のためここでは紹介に留めるが、能勢馨宛の下書きについては、河田誠一、『東京派』の文学活動を知るうえで、重要な研究資料であると考えられるため、以下に全文書き起こしを記す。一行目に「神様」という標題めいたもの、二行目に下詰めで（河田誠一）と記載がされているが、これは作品原稿の反故に、書簡の下書きを書いた結果ではないかと思われる。

〈凡例〉

仮名遣い、ルビは原文通りとした。漢字は、代用字を除き、原則新字に改めた。句読点は原文のママとし、書簡本文の改行部分は／で示した。ただし、原文における段落の分かれ目は原文の通り改行した。不明箇所は□で表し、推測箇所は〔 〕で囲って示した。

神様

（河田誠一）

能勢。長い間の寡黙をゆるせ。君も亦／手紙をくれない。

俺は君の旅に出てゐる間に帰京する事に／なるに違いない。「東京派」のために、君は、／必ず「マルドロオルの唄」「奄人の鍊金術」を早く／完成せよ。君の途中放棄的習慣の故に、／敢てこの言葉を呈し、満腔の期待に耽る。

旅とはどこか。この手紙は帰ってから見ると思ってたか。「東京派」は心配だ。寺河／君が帰省ノセが旅ではどうも苦々□物である／だが見る。俺が出てゆくとぐづぐづはしないぞ。／雲は「白」くして今日ハカナシイ日ナリ。シタレド、／ワタシラハ醜イ恋ニ身ヲヤツシテキマスガナ。ソ／シテミニクク死ナンオモヒニアズルナ人生ヲ／ヨケイタベテキルノデある。ノセ。君のキミのわ／るい手紙が恐ろしいので、瀬戸内海で蟹にな／って黙ってゐたが、留守なら、それも大丈夫で／あらう。きみは、この次の号には作品をか、ねば／ならぬと思ふ。どうだ。何だか気が変だ。君に手紙／をかく事は、一つの幽思にふける気持で何もかけぬ。をかしい。

さらに、今回の資料群には、河田誠一書簡五点以外に、海本清子書簡が一通、河田徳一書簡が一通、残されている。海本清子書簡は、田村泰次郎宛、四枚、封書、一九三四年三月十三日付である。『桜』同人を代表して、そして文壇の盟友として河田の葬儀後に、郷里香川仁尾に赴いた田村にたいして謝意を述べた手紙である。一部省略はあるものの、やはり青木の『古本探偵追跡簿』に引かれており、読むことができる。⁶⁸非常に丁寧で抑えた筆致ながら、故人への想いがにじむ文章であって、籍を入れずとも最期まで河田の傍にいたこの女性が河田にとつてどういった存在であったか、この資料が物語っている。また、河田の遺稿を田村の処分に任せる旨、ここに記されている。

河田徳一書簡は、石川利光宛、封書、三枚、一九三九年十二月七日付である。徳一は誠一の弟で河田家の三男、一九四三年に三十歳で没したが、誠一没後に兄の後を追って文学活動を行い、たびたび上京した。本書簡も、上京して石川利光とその周辺の同人たちの知遇を得たことに対する謝辞となっている。田村泰次郎は三重での訓練中の記憶として、以下のように記している。

あるとき、私たち新兵が演習のために営門を出ると、そこに一人の、やせて色の浅黒い、ひよろりとした青年が立っているのを見た。それは亡友河田誠一の弟であった。「あつ」といったが、声をかけることも出来ず、私はそのまま、隊伍にまじって、その場を遠ざかった。(中略)あとで聞くところによると、家業を捨て、兄のように文学に志して、上京したらしく、井上友一郎のところ(中略)へ、しばしば、あらわれたそうだ。(中略)彼は恐らく東京から三重県まで、亡兄の親友であった私を、陣中見舞にきてくれたのにちがいない⁶⁹。

三重県立図書館田村泰次郎文庫には河田徳一から田村泰次郎に宛てた書簡五通(封書二通、葉書三通)が残されている。日付はいずれも一九四〇年で、五月十二日、五月三十日、六月二十六日、七月二十四日、八月二十八日、宛先はいずれも三重県の久居三十三連隊(田村が訓練を受けていた連隊)宛である。これによれば、一九四〇年六月頃に半月ほど滞京し、井上や能勢、石川らに会ったこと、その途上で田村にも会ったことが分かる。

本書簡はその前年の一九三九年であり、やはり文学活動を期して上京した徳一が、石川利光を訪ねた場面であると思われる。石川は井上友一郎と『換気筒』時代の同人仲間であり、その後『桜』にも参加している(立ち上げのメンバーではなかったが、井上は石川を『桜』同人として紹介している⁷⁰)。

書簡中の「同人諸氏」であるが、顔ぶれから、『泉』同人であり、「梅阪氏」は梅坂光克、「関氏」は関良介、「市川氏」は市川為雄、「森田氏」は森田素夫、「大瀧氏」は大瀧信一であると思われる。『泉』は、一九三五年に早稲田大学英文科の学生の手で創刊された『早稲田文科』の流れを汲む雑誌である。『早稲田文科』は一九三三年十月に創刊され、『早稲田文学(第三次)』の復刊(一九三六年十一月)の影響から、『象徴時代』に改題した。しかし、『象徴時代』は一号しか発刊されず、露文科の中務保二、佐々三雄らが『朱鳥』を創刊して離脱、残ったメンバーを中心に発刊さ

れたのが『泉』である。⁽¹⁾最終的に『泉』は一九三六年十二月の五巻二号を以て終刊し、『文芸主潮』に統合されることとなるが、『早稲田文科』以来、この中心にいたのが石川利光であった。

今回の河田徳一書簡は、『河田誠一詩集』に触れているのみならず、研究が多くないこの時代の早稲田系の文学同人活動を伝える資料である。以下に書き起こし全文で紹介する。凡例は前述の通りとした。

冠省

在京中は、大へんお世話になりました。お／かげで、愉快に、毎日をすごすことができま／した。真率に文学してゐる人達と語ること／が出来たのを何よりの喜びにおもひます。／真面目に勉強し、お互に尊敬し合つて、文／学に精進してゐる同人諸氏を、友人に持つ／ことのできたのは、私の生涯の幸福です。／あなたや梅阪氏や同人諸氏の、友情に酬ゆ／るためには、よい文学を、すぐれた作品／をもつてするのが、もつともよい方法だと／私は考へております。

故人の詩集についても、私自身の作品につ／いても、今後いろいろと御迷惑をおかけす／るだらうとおもはれます。宜しくお願ひし／ます。

奥様に宜しくお伝へ下さい。

梅阪氏、関氏、市川氏、森田氏、大瀧氏に／宜しくお伝へ下さい。

十二月六日

河田 徳一

石川利光 様

(六) 雑誌『東京派』二冊(一九三一年四月号Ⅱ三号、一九三二年六月号Ⅱ四号)

『東京派』は、昭和五年十二月、早稲田大学第二高等学院に在学していた秋田滋、神絢(能勢馨)、河田誠一、大島博光、田村泰次郎、瀧口俊吉の七名を同人として発刊された文芸誌である。東京派社発行。昭和六年八月号まで、全六号が発刊された。⁽⁷³⁾ 第三号より田中悠、宮川健一郎が同人に加わった(編集後記より)。

稀覯本であり、青木正美も「肝心の、昭和五年十二月に河田が同人となって創刊した『東京派』、やはり同人となつて昭和八年に出る文芸雑誌「桜」などは一冊として市場で見かけることが出来なかつた⁽⁷⁴⁾」と述べている。この雑誌については、紅野敏郎による紹介が詳しく、参照されたい。⁽⁷⁵⁾ 同人による創作、評論のほか、フランス文学、英米文学の翻訳や紹介がなされている。河田誠一の作品は一号に「日本悲歌」(小説)、⁽⁷⁶⁾「ヴィヌスの墓(レエモン・ラヂゲ)」(翻訳)、「停止(レエモン・ラヂゲ)」(翻訳)、二号に「海豚の花」(小説)、「東京派の馬鹿」(その他)、三号に「印度ブレハの夏」(小説)、「アドリアンヌ・メジュラ(ジュリアン・グリーン)」(翻訳)、「横光利一序説」(評論)、四号に「AMAZON」(小説)、五号に「野獣」(小説)、「伝説(ユウジェン・ジオラス)」(翻訳)、六号に「スマイルン」(小説)が掲載されている。

今回早稲田大学所蔵となったのは、一九三二年四月号(第三号)および一九三二年六月号(第四号)である。青木は、(一九九三年の時点で)「やつと二冊だけその後見つけた」「二十五年間で見つけたのは、「東京派」の三、六号の二冊だけなのだ」と述べているが、今回の一連の河田資料が青木旧蔵であることをあわせて考えると、この時青木が入手した二冊はやはり三、六号ではなく、三、四号であつて、これが今回、本学蔵書となつたと考えられる。早稲田大学図書館としては、前述の通り、稲門関係資料として長年探求しながらも入手できなかった資料の一つであり、今回河田の資料とあわせてこの雑誌の一部を入手できたことは、望外の喜びである。その後、古書店より第五号を入手することができ、早稲田大学図書館蔵書は三号、四号、五号となつた。

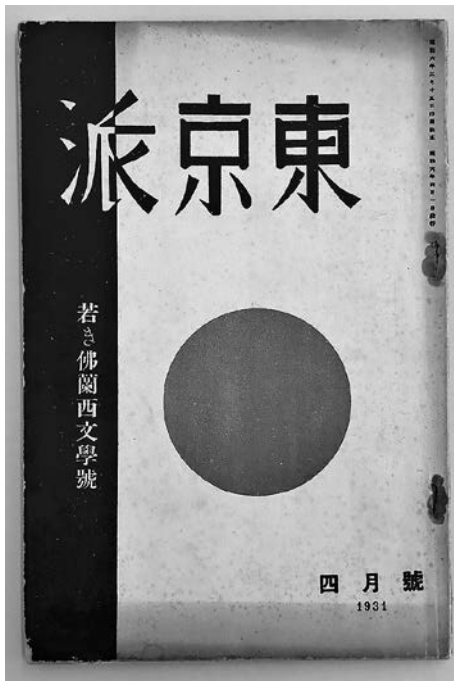


図6 『東京派』第三号表紙

早稲田大学図書館蔵書を除いて、現在確認できる所蔵機関は、日本近代文学館（全六号揃）、神奈川近代文学館（五号）、三重県立図書館（一号―三号、六号）、堺市立図書館（五号）、の四箇所である。三重県立図書館は田村泰次郎文庫、堺市立図書館は安西文庫であり、前述の通りである。神奈川近代文学館であるが、ウエブの蔵書目録に「近藤東文庫」とあり、モダンイズム詩人近藤東が残し、同文学館に寄贈された膨大な詩誌の一つとしてこの稀覯誌が今日に残されたことがわかる。

本稿末尾に、付録として『東京派』全六冊の総目次を付したので、ご活用いただきたい。

注(第二章)

- (35) 青木正美『古本探偵追跡簿』(マルジュ社 一九九五年一月)
- (36) 紅野敏郎「昭森社(森谷均)の『河田誠一詩集』―河田誠一・草野心平・田村泰次郎・井上友一郎ら」(『国文学 解釈と鑑賞』六十八巻四号 二〇〇三年四月 二二〇～二二三頁)
- (37) 紅野敏郎「昭森社(森谷均)の『河田誠一詩集』」(前掲注(36))
- (38) 井上友一郎「河田誠一詩集」について」(『現代文学』四巻八号 一九四一年九月 一一九～一二二頁)
- (39) 田村泰次郎『わが文壇青春記』(新潮社 一九六三年三月)では、一九三六年に発生した二・二六事件の数日後のエピソードとして、「草野心平や逸見猶吉たちと、銀座裏の酒場で泥酔した」場面が描写されている(九九頁)。また、高田馬場の「うるま」という泡盛屋を回想した場面では、「そこで、私は多くの詩人や画家と友だちになった。辻潤や草野心平もきていた」(二四頁)と述べられており、これが「二十代の前半」とされているので、一九三五年(二十四歳)以前に草野と田村は知り合い、以後、交誼を結んだと考えられる。
- (40) 田村泰次郎「河田誠一の詩について」(『歷程』四号 一九三六年四月 四五～四七頁)
- (41) 菱山修三「不帰の埃及人」(『桜』二巻三号(河田誠一追悼号) 一九三四年七月 九九～一〇〇頁)
- (42) なお、佐々木正夫「河田誠一の人と作品」(『四国作家』八号 一九七三年六月 六十七～七十三頁)によれば、「装幀、編集は、当初、萩原朔太郎が担当するはずだったが、途中で草野心平が引き受け」とある。草野心平は前橋在住時に萩原朔太郎と交流を持っているが、詳細な経緯は不明である。
- (43) 井上友一郎「河田誠一詩集」について」(前掲注(38))
- (44) 佐々木正夫「河田誠一の人と作品」(前掲注(42))。佐々木正夫(一九二六～)は香川で活動し『四国文学』などを主宰した小説家。「讃岐の文学散歩」(四国毎日広告社 一九七〇年九月)で、河田家に残されていた資料や、母マスノへのインタビューを行い、河田誠一を紹介した。「新讃岐の文学散歩」(四国新聞社 一九九八年六月)でも、河田を紹介している。中村猛は河田と同郷の文学者で、昭和二十六年七月に郷里香川仁尾町の公民館で「河田誠一遺稿展」を開催し、ガリ版刷の『散りぬるを』を残した。

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

(45) 佐々木正夫「河田誠一の人と作品」(前掲注(42))。

(46) 佐々木正夫「河田誠一の人と作品」(前掲注(42))によれば、一九七三年の時点で、河田の生家には「寄贈名簿」のほか、「田村泰次郎、井上友一郎、石川利光の手紙やハガキが十数本、同人雑誌「桜」の河田誠一追悼号、田村、井上らといっしょに撮った写真数葉、そして、「河田誠一詩集」一冊」が残されていた、とのことである。しかし、一九九三年に香川仁尾に調査に赴いた青木は、河田の生家に残されていた資料は焼失し、町に残されているのは永田敏之(一九三二〜)『讃岐文学』主宰者。一九四四年に『ふるさと文学館 第四三巻 香川』で河田の詩三篇を再録し、紹介した)が国立国会図書館でコピーした河田の詩集一冊のみである、との証言を得ている。そのため、佐々木が挙げたこれらの資料も、その際に焼失したのではないかと思われる。

(47) 確認・転記元は前掲「河田誠一の人と作品」に依った。青木正美『古本探偵追跡簿』(前掲注(35))にもこの名簿が転載されているが(四四三頁)、出典中、以下の三名については、明らかな誤記であると考えられるため、本稿で修正した。

隠岐利一 ↓ 隠岐和一(沖和一)。『東京派』同人。

安川健一郎 ↓ 宮川健一郎。『東京派』同人。

辺見猶吉 ↓ 逸見猶吉。『歷程』同人。

出版社宛十八冊の贈呈先は、以下の通りである。

東京朝日学芸部、東京日日学芸部、都新聞文化部、読売新聞学芸部、中外新報学芸部、国民新聞学芸部、日本学芸新聞社、東京帝大新聞社、早大新聞社、三田新聞社、大阪朝日学芸部、大阪毎日学芸部、中央公論社、改造社、文芸春秋社、新潮社、日本評論社、早稲田文学社。

(48) 田村泰次郎「河田誠一の詩について」(前掲注(40))

(49) 青木正美『古本市場掘出し奇譚』(日本古書通信社 一九八六年十月)

(50) 青木正美『古本探偵追跡簿』(前掲注(35))三〇〇頁、青木正美『自己中心の文学 日記が語る明治・大正・昭和』(博文館新社 二〇〇八年九月)一四五頁

(51) 三重県立図書館『田村泰次郎文庫目録 三重県立図書館収蔵』(三重県立図書館 一九九四年三月)。同書の目録はインター

ネットでも閲覧可能である (http://www.library.pref.mie.lg.jp/?page_id=147)

(52) 佐々木正夫「河田誠一の人と作品」(前掲注(42))では、河田誠一宛の西條八十葉書(一九二九年四月二十六日消印)が次の通り紹介されている。「いつかは失礼しました。今夜あなたの詩を読んで、サンバシの春をいい作だと思いました。私は詩だけおぼえていて、作者は忘れてしまうのです。お遊びにいらっしやい。お目にかかりましょう」。サンバシの春々であるのは、「サンバシの春」(『愛誦』四巻六号、一九二九年六月)の誤記であると思われるが、いずれにせよ、一九二九年に上京した河田がすぐに西條に連絡を取り、西條もこれに応えたことが分かる。また、同時代に『愛誦』に投稿していた桂孝二は、「八十の影響が河田誠一の詩に見えるが、それが彼をして早稲田大学へ進ませたのであろうと思う」と回想している(桂孝二「河田誠一小記」(『四国作家』八号 一九七三年六月 七六～七七頁))。

(53) 堺市立図書館編『安西文庫目録 堺市立図書館蔵安西冬衛氏旧蔵図書』(堺市立図書館 一九七五年八月)

(54) 戦前の日本の刊行物は、「出版条例」「出版法」に基づいて内務省に正副二部納本されたのち、正本は内務省での検閲に使用され、副本は帝国図書館に移管された。後者が、内務省交付本(内交本)と呼ばれるもので、現在は国立国会図書館蔵書となっている。今回、国立国会図書館所蔵『河田誠一詩集』について確認したところ、標題紙標題に「帝国図書館蔵」、標題紙下部に二重丸印で「帝図/昭和十五・十・廿九・納本」とあり、内交本であることが確認できる。(参考) 国立国会図書館「国立国会図書館所蔵の内務省交付本」(ウェブサイトで、<https://navindl.go.jp/research/guide/entry/theme-honbun-100046.php>)

(55) 国立国会図書館「図書館向けデジタル化資料送信サービス」(ウェブサイトで、https://www.ndl.go.jp/use/digital_transmission/index.html)

(56) 確認できる蔵書印は次の通り。見返しに「井上友一郎氏寄贈 新居格文庫 No.660」(角印)。標題紙に「杉並区立図書館 No.雑誌課 昭和27年9月1日受贈」(丸印)、および「東京都立 503.19 中央図書館」(丸印)。十頁に「東京都杉並区立図書館蔵書」(角印)。奥付ひとつ前の白頁に「新居格記念会氏寄贈」(角印)、および「杉並区立図書館 No.雑誌課 昭和27年9月1日受贈」(丸印)、および「911 50K」(角印)。奥付に「杉並区立図書館」(角印)、および「都立中央図書館」(角印)。(57) 「故人の抱負実現へ 杉並に「新居格記念会」生る」(『読売新聞』一九五一年十二月十二日東京朝刊 四頁)。(58) 「全国に呼び掛ける 新居格記念会 運動文庫、託児所設置など計画」(『読売新聞』一九五二年三月九日東京朝刊 四頁)

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

- (59) 青木正美収集・解説、保昌正夫監修『近代詩人・歌人自筆原稿集』（東京堂出版 二〇〇二年六月）一四〇頁
- (60) 青木正美『古本探偵追跡簿』（前掲注(35)）三八五頁～三八八頁
- (61) 『近代詩人・歌人自筆原稿集』（前掲注(59)）一四二～一四三頁
- (62) 青木正美『古本探偵追跡簿』（前掲注(35)）三八一頁
- (63) 青木正美『自己中心の文学 日記が語る明治・大正・昭和』（前掲注(50)）一二三頁
- (64) 青木正美『古本探偵追跡簿』（前掲注(35)）三四〇～三四四頁
- (65) 青木正美『古本探偵追跡簿』（前掲注(35)）四〇六
- (66) 青木正美『古本探偵追跡簿』（前掲注(35)）三五〇～三五五頁
- (67) 青木正美『古本探偵追跡簿』（前掲注(35)）三九七～四〇三頁、四一七～四二二頁
- (68) 青木正美『古本探偵追跡簿』（前掲注(35)）四二九～四三〇頁
- (69) 田村泰次郎『わが文壇青春記』（前掲注(39)）一七五～一七六頁
- (70) 井上友一郎『泥絵の自画像』（エポナ出版 一九七七年十一月）一一六頁。「昭和八年に入って、同人雑誌の中でも力のありつづけていた。集まったのは、私と田村泰次郎、河田誠一のほか、坂口安吾、菱山修三、真杉静江、矢田津世子、それに、少しおくれて北原武夫、石川利光らであった。」
- (71) 森田素夫「泉」（『早稲田文学（第三次）』三卷九号 一九三六年九月 六十六～六十七頁）
- (72) 同人記載は創刊号編集後記の順による。
- (73) 日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第五卷 新聞・雑誌』（講談社 一九七七年十一月）では全五冊となっているが、全六冊が現存し、その最後の号で「今号はともかく『東京派』としての終刊です」と述べていることから、全六冊である。なお、田村泰次郎は『わが文壇青春記』（前掲注(39)）で五冊と誤認している。
- (74) 青木正美『古本探偵追跡簿』（前掲注(35)）三〇五頁
- (75) 紅野敏郎「『東京派』——田村泰次郎・大島博光・河田誠一・宮川健一郎ら」『文芸誌譚 その「雑」なる風景一九一〇——

九三五年」（雄松堂出版 二〇〇〇年一月）

本章引用資料について便宜を図っていただきました、三重県立図書館田村泰次郎文庫、田村泰次郎氏ご遺族、西川満氏ご遺族、井上友一郎氏ご遺族に、この場を借りて深くお礼申し上げます。

三 河田誠一作品年譜と新発見資料「坂」

第三章では、河田誠一の作品のうち、図書、雑誌等に掲載された作品の年譜を掲載する。

作品年譜作成に当たっては、各種文献の記述や、『現代詩誌総覧』（日外アソシエーツ 一九九六～一九九八年）などの索引類によって掲載誌を調査し、判明した掲載誌の原本を確認した。可能な限り掲載原本調査を試みたが、原本未確認の場合は、掲載誌冒頭に「*」印を付し、典拠を併せて記載した。

今回、原本未確認となった作品の典拠は以下の通りである。

- 典拠① 剣持雅澄「四國文学」創刊号（『ずいひつ無帽』四三五号 二〇〇〇年一月 二十二～二十四頁）
- 典拠② 青木正美『古本探偵追跡簿』（前掲）
- 典拠③ 佐々木正夫「河田誠一の人と作品」（『四国作家』八号 一九七三年六月 六十七～七十三頁）

一方で、今回の調査によって初めて作品名が明らかになった資料として、小説「坂（二名、るい子の事）」がある。これは、三重県立図書館田村泰次郎文庫所蔵の『羅女奈土』一九二九年六月号の調査によって今回初めて掲載を確認できた。『羅女奈土』は早稲田大学仏文科の西川満が主宰した雑誌であり、田村泰次郎の『わが文壇青春記』において、

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

「それに私も、河田も、はじめて小説らしきものを書いた」(二三頁)との記述があり、これによって作品の存在のみ、知られていたものである。

また、一九三三年九月の『ヌウヴェル』創刊号に「浪の雪」という小説が掲載されており、これ自体は知られていたが、この作品が同じ年に刊行された『小説・エッセイ』という図書に掲載されていることは、先行文献に言及がない。この書籍は『ヌウヴェル』を主宰した神戸雄一が、同誌と同じ版元である朝日書房から同誌創刊号を複製して出版したものである。

〈凡例〉

年ごとに、以下の形式で記載した。

《作品種別》「作品名」巻号(月)頁 ※典拠(右の通り)・備考

作品名は目次ではなく当該ページ記載の表記を採用し、仮名遣い、ルビは原文通りとした。漢字は、代用字を除き、原則新字に改めた。

(一) 生前

一九二六年(大正十五・昭和元) 十五歳

* 《短歌二十首》「夢が血の歌」『巨鼈』第22号(十二月) ※典拠②

* 《短歌十一首》「(作品名なし)」『巨鼈』第22号(十二月) ※典拠②

* 《作文》「故郷平石に遊ぶ」『巨鼈』第22号(十二月) ※典拠②

一九二七年（昭和二） 十六歳

《短歌四首》「悲恋」『愛誦』二卷三号（三月） 63頁

《詩（小曲）》「春宵の風」『愛誦』二卷五号・第13号（五月） 81～82頁

* 《小説》「恋を求むるもの」『四国文学』創刊号（五月） ※典拠①、「沙々波暁太」名義

* 《不明》「死」『四国文学』創刊号（五月） ※典拠①

* 《短歌》「愁春秘篇」『四国文学』創刊号（五月） ※典拠①

《詩（小曲）》「初夏のうれひ」『愛誦』二卷九号・第17号（九月） 38頁

《詩（小曲）》「若き日」『愛誦』二卷九号・第17号（九月） 83～84頁

《詩（小曲）》「南のくに」『愛誦』二卷十号・第18号（十月） 84頁

一九二八年（昭和三） 十七歳

* 《「花月草紙」の解釈文》（作品名未詳）『巨鼈』第23号（二月） ※典拠②

* 《短歌八首》（作品名未詳）『巨鼈』第23号（二月） ※典拠②

* 《詩》「高原の息」『巨鼈』第23号（二月） ※典拠②

* 《詩》「日本の笛」『巨鼈』第23号（二月） ※典拠②

* 《詩》「去年の落葉」『巨鼈』第23号（二月） ※典拠②

《詩》「青い空」『愛誦』三卷一号・第21号（二月） 68頁

《詩》「海辺の断章」『愛誦』三卷三号・第23号（三月） 79頁

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

- 《詩》「生存の灯影」『愛誦』三卷四号・第24号（四月）84～85頁
 《詩（小曲）》『病床月前の賦』『愛誦』三卷八号・第28号（八月）86頁
 《詩（童謡）》「オコン山」『愛誦』三卷八号・第28号（八月）91頁
 《詩（小曲）》『満潮』『愛誦』三卷九号・第29号（九月）85頁 ※著者名「河田誠」と誤記
 《詩（民謡）》「黒瞳」『愛誦』三卷十号・第30号（十月）97頁
 《詩（民謡）》「リンデンの花」『愛誦』三卷十一号・第31号（十一月）99～100頁

一九二九年（昭和四） 十八歳

- * 《作文》「秋思」『巨鼈』第24号（発行年月不明） ※典拠②
 《詩》「秋かぜの賦」『愛誦』四卷一号・第33号（二月）96～97頁
 《詩》「生きてゆくといふトンネル」『愛誦』四卷二号・第34号（二月）
 《詩》「月光の中に」『愛誦』四卷三号・第35号（三月）73～74頁
 《詩》「ある印象」『愛誦』四卷五号・第37号（五月）75頁
 《詩》「サンパンの春」『愛誦』四卷六号・第38号（六月）71～72頁
 《小説》「坂（一名、るい子の事）」『羅女奈土』巻号不明（六月）33～53頁 ※本稿調査で作品名が判明した。三重県立図書館田村泰次郎文庫所蔵。
 《詩》「春の港」『愛誦』四卷七号・第39号（七月）44頁
 《詩》「海辺の町」『愛誦』四卷九号・第41号（九月）44～45頁

《詩》「海浜牧歌―わが海辺の詩の五―」『愛誦』四卷十一号・第43号（十一月）42～43頁

一九三〇年（昭和五） 十九歳

《詩》「亡春の歌」『愛誦』五卷一号・第45号（一月）43頁

《詩》「航海」『愛誦』五卷二号・第46号（二月）81～82頁

《その他》「私信」『愛誦』五卷三号・第47号（三月）42頁

《詩》「白氷の扉」『愛誦』五卷三号・第47号（三月）55頁

《詩》「亡春―その五―」『愛誦』五卷四号・第48号（四月）61頁

《詩》「春」『愛誦』五卷四号・第48号（四月）61頁

《詩》「映像」『愛誦』五卷五号・第49号（五月）44～45頁

《短評》「私の月評」『愛誦』五卷五号・第49号（五月）71頁

*《不明》「四国一周旅行」『大阪化粧品商報』巻号不明（年月不明）※典拠②

《詩》「雨―早大仏文科ラメナド同人への訣別―」『愛誦』五卷六号・第50号（六月）38頁

《詩》「火龍―自殺に就ての三―」『愛誦』五卷七号・第51号（七月）66頁

《短評》「泥人形を抱く―没落末期現象其他―」『愛誦』五卷八号・第52号（八月）50～51頁

《詩》「凱風快晴」『愛誦』五卷八号・第52号（八月）72～73頁

《短評》「詩壇時評 むづがゆき感情」『愛誦』五卷九号・第53号（九月）44～45頁

《詩》「色情哀史―放浪詩篇の七―」『愛誦』五卷九号・第53号（九月）75～76頁

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

- 《評論》「室生犀星論（上）」『愛誦』五卷九号・第53号（九月）80～83頁
 《評論》「室生犀星論（下）」『愛誦』五卷十号・第54号（十月）29～33頁
 《詩》「日本悲歌―夏果―」『愛誦』五卷十号・第54号（十月）78～79頁
 《短評》「詩壇時評」『愛誦』五卷十一号・第55号（十一月）42～43頁
 《詩》「本牧以来―ポエジイ・ド・ロマン―」『愛誦』五卷十一号・第55号（十一月）51～52頁
 《評論》「詩の「分化」、其他二三の問題―新らしき詩の方向―」『愛誦』五卷十一号・第55号（十一月）79～82頁
 《詩》「ひつぎふね 枢船詩篇抄」『愛誦』五卷十二号・第56号（十二月）68～69頁
 《小説》「日本悲歌」『東京派』創刊号（十二月）18～31頁
 《翻訳》「ヴィヌスの墓（レエモン・ラヂゲ）」『東京派』創刊号（十二月）79頁
 《翻訳》「停止（レエモン・ラヂゲ）」『東京派』創刊号（十二月）79頁

一九三二年（昭和六）二十歳

- 《評論》「石川啄木論」『愛誦』六卷一号・第57号（二月）54～57頁
 《詩》「流木」『愛誦』六卷一号・第57号（二月）86～87頁
 《小説》「海豚の花」『東京派』二号（二月）43～51頁
 《その他》「東京派の馬鹿」『東京派』二号（二月）57頁
 《評論》「石川啄木論」『愛誦』六卷二号・第58号（二月）23～27頁
 * 《創作》「妻を捨てる日」『大阪化粧品商報』卷号不明（二月） ※典拠②

* 《詩》「早春」「新月」巻号不明(二月) ※典拠②

* 《翻訳》「マルタの想苑(ナ・リイヴィス)」「東行」一号(発行年月不明) ※典拠②

《詩》「風」「愛誦」六巻三号・第59号(三月) 28～29頁

《詩》「恐ろしき花」「愛誦」六巻四号・第60号(四月) 72～73頁

《小説》「花と金鉱」「今日の文学」一卷四号(四月) 30～36頁

《評論》「横光利一序説—L'honneur à une femme—」「東京派」三号(四月) 89～92頁

《小説》「印度ブレハの夏」「東京派」三号(四月) 28～41頁

《翻訳》「アドリアンヌ・メジユラ(ジュリアン・グライン)」「東京派」三号(四月) 65頁

《小説(ロント)》「椿—TSUBAKI—」「愛誦」六巻五号・第61号(五月) 78～77頁

《小説》「AMAZON—一名・熱病夜話—」「東京派」四号(六月) 5～10頁

《詩》「アラビヤ夜話—青春否定の詩—」「愛誦」六巻六号・第62号(六月) 78～79頁

* 《評論》「新文学について」「今日の文学」巻号不明(六月) ※典拠③

《詩》「悪の門」「愛誦」六巻七号・第63号(七月) 73～74頁

《翻訳》「伝説(ユウジエン・ジョラス)」「東京派」五号(八月) 82～92頁

《小説》「野獸」「東京派」五号(八月) 46～51頁

《評論》「新進作家の作品—主として一九三二上半期の同人雑誌による—」「今日の文学」一卷九号(九月) 50～53、

77頁

《詩》「白色病院—ある青年の遺稿—」「愛誦」六巻十号・第66号(十月) 76～77頁

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

《小説》「スミルン」『東京派』六号（十一月）6～9頁

《評論》「谷崎潤一郎」『新科学的文芸』二卷十二号（十二月）52～54頁

一九三二年（昭和七）二十一歳

* 《小説》「緞帳」『青猫』卷号不明（二月）※典拠②、典拠③

* 《小説》「椿姫」『今日の文学』卷号不明（二月）※典拠③

* 《評論》「井上友一郎論」『今日の文学』卷号不明（二月）※典拠②、典拠③

《小説》「海薔薇」『新科学的文芸』三卷三号（三月）13～24頁

《小説》「浪の雪」『ヌウヴェル』第一号（九月）183～190頁

《評論》「矛と盾など」『今日の文学』二卷十一号（十一月）19～21頁

（再録）《小説》「浪の雪」『小説・エッセイ』（朝日書房 一九三二年十二月）183～190頁

一九三三年（昭和八）二十二歳

《童話》「海辺の話」『時事新報』一七八七〇号（三月五日）10頁

《小説（コント）》「人魚に惚れる」『モダン日本』四卷二号（二月）70頁

《小説》「真夏の蘭」『桜』一卷一号（五月）49～62頁

《座談会》「文学の新精神を語る座談会（井上友一郎・大島敬司・河田誠一・坂口安吾・田村泰次郎・堀寿子・真杉静枝・

矢田津世子）」『桜』一卷一号（五月）160～172頁

《小説》「古見の男の話」『文芸首都』四月号（四月）47～65頁

《小説》「無花果」『桜』一卷二号（七月）120～122頁

一九三四年（昭和九）二十三歳

《その他》「消息二つ」『桜』二卷一号（二月）140頁

（二）没後

一九三四年（昭和九）

《小説》「新城榛名の手記（遺稿）」『桜』二卷二号（四月）8～27頁 ※末尾に「長編「山雀」の内より」

《詩》「アラビヤ」『桜』二卷三号（四月）94～95頁

《詩》「悲惨の港」『桜』二卷三号（四月）95～96頁

《詩》「海洋詩篇（遺稿）」『翰林』二卷四号（四月）88～89頁

《詩》「一夜（遺稿）」『桜』二卷四号（七月）90～91頁

一九三六年（昭和十一）

《詩》「残雪（遺稿）」『歷程』四号（二〇月）

一九四〇年（昭和十五）

- 〔再録〕《詩》「春」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）7頁 ※未発表詩稿『夏の終り』所収（以下『夏』）
- 《詩》「暗礁」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）8頁
- 《詩》「化石」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）9頁 ※『夏』
- 《詩》「江戸菊」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）10頁
- 《詩》「ある希望」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）11頁 ※『夏』
- 《詩》「遊心」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）12～13頁
- 《詩》「つめたき人々」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）14～15頁
- 《詩》「短唱」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）16～17頁 ※『夏』
- 《詩》「オイ」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）18～19頁 ※『夏』
- 《詩》「過ぎゆく日」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）20～21頁 ※『夏』
- 《詩》「雨天の」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）22～23頁 ※『夏』
- 《詩》「鼻血」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）24～25頁 ※『夏』
- 《詩》「さくら花 1」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）26～27頁 ※『夏』
- 《詩》「さくら花 2」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）28～29頁 ※『夏』
- 〔再録〕《詩》「残雪」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）30～31頁 ※『夏』
- 《詩》「燃ゆる村落 放浪詩篇その二」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）32～33頁 ※『夏』
- 《詩》「風塵の故郷 放浪詩篇その二」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）34～36頁 ※『夏』

《詩》「哭く」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）37～39頁※『夏』
《詩》「南方哀別日日」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）40～43頁※『夏』
《再録》《詩》「春の港」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）44～45頁
《詩》「炎天」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）46～48頁※『夏』
《詩》「悲惨の港」『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）49～51頁

一九七一年（昭和四十六）

《再録》《座談会》「文学の新精神を語る（井上友一郎・大島敬司・河田誠一・坂口安吾・田村泰次郎・堀寿子・真杉静枝・矢田津世子）」『定本坂口安吾全集 第二二卷』（冬樹社 一九七一年）9～21頁

一九九四年（平成六）

《再録》《詩》「春の港」『ふるさと文学館 第四三卷 香川』（ぎょうせい 一九九四年）606頁
《再録》《詩》「春」『ふるさと文学館 第四三卷 香川』（ぎょうせい 一九九四年）606頁
《再録》《詩》「短唱」『ふるさと文学館 第四三卷 香川』（ぎょうせい 一九九四年）607頁

一九九九年（平成十二）

《再録》《座談会》「文学の新精神を語る（井上友一郎・大島敬司・河田誠一・坂口安吾・田村泰次郎・堀寿子・真杉静枝・矢田津世子）」『坂口安吾全集17』（筑摩書房 一九九九年）5～18頁

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

付1 『東京派』総目次

以下に、『東京派』全六冊総目次を掲載する。早稲田大学未所蔵の一号、二号、六号は、日本近代文学館所蔵本で確認を行った。

一九三一年創刊号

昭和五年十二月一日発行菊判定価三十銭

発行所 東京派社、編集兼発行者 能勢馨、表紙 塩田了

評論

「意識の流れ」統制論—*a mes amis*— (田村泰次郎)

∴ 5 ∽ 13

ハックスレイの発展 (アンドレ・モオロア / 織田晋訳)

∴ 14 ∽ 17

作品

日本悲歌 (河田誠一) ∴ 18 ∽ 31

交軌線 (神絢) ∴ 32 ∽ 41

寒い星のある夜の対話 (秋田滋) ∴ 42 ∽ 49

碧眼の妹たち (寺河俊雄) ∴ 50 ∽ 59

アキレス (大島博光) ∴ 60 ∽ 65

挑戦 (田村泰次郎) ∴ 66 ∽ 73

詩

エリオット抄 (T・S・エリオット / 瀧口俊吉訳) ∴

74 ∽ 75

金の匙 (ハリイ・クロスビー / 瀧口俊吉訳) ∴ 76

白いスリッパ (ハリイ・クロスビー / 瀧口俊吉訳) ∴

76

REVIRGINATE (ハリイ・クロスビー／瀧口俊吉訳) …

76

ピカソの肖像 (ガートルウド・スタイン／田村泰次郎訳)

… 76

L'esprit de R.Radiguet — à jean cocteau — (マックス・

ジャコブ／大島博光訳) … 78

編集後記 … 85

… 80～84

クラリッサの仲間達 (ヴァジニア・ウウルフ／瀧口俊吉

停止 (レエモン・ラヂゲ／河田誠一訳) … 79

ヴィヌスの墓 (レエモン・ラヂゲ／河田誠一訳) … 79

一九三二年新年号 (第二号)

昭和六年一月一日発行菊判定価三十銭

発行所 東京派社編集兼発行者 能勢馨表紙 塩田了

作品

翅粉 (神西清) … 5～8

蟹気楼 (宗瑛) … 9～11

植民地 (寺河俊雄) … 12～16

成長記 (田村泰次郎) … 17～23

時差 (安西冬衛) … 24

白い丘の陽炎 (神絢) … 25～27

『独逸的な雲』抄 (渡邊修三) … 28

肥厚性鼻炎 (大島博光) … 29～35

蝙蝠は南へ飛ぶ (秋田滋) … 36～42

海豚の花 (河田誠一) … 43～51

エスキイス

ハリイ・クロスビー (瀧口俊吉) … 58～61

アルチュール・ランボオ (レミ・ド・グウルモン／西垣蓁

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

訳 …… 62～64

風景（ロオヂエ・ヴィトラック／織田晋訳） …… 65～67

戦争来・永遠ノ行為（エヅラ・パウンド／田村泰次郎訳）

…… 68～69

海の凝視（ポオル・ヴァレレイ／吉野治夫訳） …… 72～

74

巴里の農夫（ルイ・アラゴン／大島博光訳） …… 75～78

新粧の庭園（瀧口俊吉） …… 70

阿片室

T・S・エリオットの「新転向」（田村泰次郎） …… 52～

53

一九三二年四月号（第三号） 若き仏蘭西文学号

昭和六年四月一日発行菊判定価三十銭

発行所 東京派社編集兼発行者 能勢馨表紙 塩田了

作品

聖氷謝肉祭（寺河俊雄） …… 4～20

ワルブルギスの夜（神絢） …… 53～54

海（瀧口俊吉） …… 54

かはりやすい風景（マックス・ジャコブ／秋田滋訳） ……

54～55

グルウプ・スカビル―T O K Y O（大島博光） …… 55

56

ある広告文から（アンリ・ド・モンテルラン／寺河俊雄

訳） …… 56～57

東京派の馬鹿（河田誠一） …… 57

編集後記 …… 79

遂げず（大島博光） …… 21～27

印度ブレハの夏（河田誠一） …… 28～41

文学 (田村泰次郎) …… 42～51

最近の我国文学の国際的傾向を如何に見るか (春山行

夫 / 吉行エイスケ / 井伏鱒二 / 渡邊修三 / 板垣鷹穂 / 神

西清 / 安西冬衛 / 中河与一 / 飯島正 / 伊藤整 / 阿部知

二) …… 52～53

若き仏蘭西文学研究

仏蘭西の新しい雑誌 (田村泰次郎) …… 78～81

グロッセル (寺河俊雄) …… 66～69

死と疾患と文学と (ルネ・クルウベル / 大島博光訳) ……

54

スノビズム (SNOB) (ニノ・フランク / 寺河俊雄訳) ……

55

マルグリット (ジャック・バロン / 宮川健一郎訳) ……

56

現実 (ロベール・デスノス / 田村泰次郎訳) …… 57

日本の日本—アンリ・ヴェレエルへ— (ルネ・ギルレ

／神絢訳) …… 57

変貌 (ヂルベール・トリリエ / 田中悠訳) …… 58

Marius (ロオヂエ・ヴィトラック / 寺河俊雄訳) …… 58

Geld (ジャンヌ・ベエラッシュ / 神絢訳) …… 59

腐敗した驢馬 (サルヴァドル・ダリ / 大島博光訳) ……

60

飯酒のために (ハロルド・J・サルムソン / 宮川健一郎訳)

…… 61

海風の薔薇 (フランソア・ベルトオル / 田中悠訳) ……

62

移住民を阻止し給ふな—幻惑的な城のほとり—

(ジャック・ヴィオ / 織田晋訳) …… 63

一つの整理或ひは海馬の歴史 (ジャック・プレベール /

大島博光訳) …… 63

真空的爛熟 (敗訴者物語) (ロオラン・ド・ルネヴィル /

田村泰次郎訳) …… 64

アドリアンヌ・メジュラ (ジュリアン・グレイン / 河田

誠一訳) …… 65

鴉片 (ジャン・コクトオ / 宮川健一郎訳) …… 70～72

人間 (アンドレ・ブルトン / ポール・エリュアール / 大島博

光沢 …… 73～77

横光利一序説—L'honneur à une femme—(河田誠一)

…… 89～92

阿片室

「アメリカ実験文学号」に就いて(瀧口俊吉) …… 82

家鴨BとEと。(大島博光) …… 83

巴里・シュウルレアリスト(寺河俊雄) …… 83

一九三二年六月号(第四号) ロオトレアモン特集

昭和六年六月一日発行菊判定価三十銭

発行所 東京派社編集兼発行者 能勢馨表紙 塩田了

作品

AMAZON—一名・熱病夜話—(河田誠一) …… 5

10

島を去る(宮川健一郎) …… 11～23

翻訳

実験と表現(ピイエル・ラヴィング／中川良秀訳) ……

精神分析小説の危機(田村泰次郎) …… 84～85

デュアメル近作(秋田滋) …… 86

チャーナリズムと作品(宮川健一郎) …… 86

サトポロ(田中悠) …… 87

Vicoに就いて(神絢) …… 88

編集後記 …… 93

24～29

言語に就いて(ハリイ・クロスビー／神絢訳) …… 30

31

ロオトレアモン特集

革命意識としてのロオトレアモニスムに就いて(田村

泰次郎) …… 32～35

ロオトレアモン 虚無の犠牲（ピエール・オオダール／大島博光訳） …… 36～37
 断片（レオン・ピエルカン／織田晋訳） …… 38～41
 マルドロオルの歌（ロオトレアモン／神絢訳） …… 43

…… 47
 新刊批評（アラダイス・ニコル著／清野暢一郎・菅原太郎
 訳『戯曲言論入門』／春山行夫著『詩の研究』） …… 42
 編集後記 …… 48

一九三二年八月号（第五号） 特集アメリカ文学

昭和六年八月一日発行菊判定価三十銭

発行所 東京派社編集兼発行者 能勢馨表紙 塩田了

作品

性格（神絢） …… 4～5
 ヴァリエター或は Un Vagabond —（大島博光） ……
 6～14
 汗カシの亡霊（安西冬衛） …… 15～22
 烈日湖畔（宮川健一郎） …… 23～30
 太陽（沖和一） …… 31～37
 蠟燭街（寺河俊雄） …… 38～45
 野獸（河田誠一） …… 46～51

評論

活動的言語と現実（田村泰次郎） …… 56～59
 特集アメリカ文学
 ピラミッド的スタイン—fragment—（春山行夫） ……
 60～64
 黒人文学について（宮川健一郎） …… 65～71
 言語学（ロバート・セイヂ／寺河俊雄訳） …… 72～76
 アメリカ通信（バアナアド・スミス／沖和一訳） …… 77
 …… 79

河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について

スタインへの書簡（リンドレイ・ウイリヤムス・ハッベル

肖像（ケイ・ボイル／瀧口俊吉訳） …… 93

／大島博光訳） …… 80～81

アメリカ前衛雑誌から（N） …… 52～55

伝説（ユウジェン・ジオラス／河田誠一訳） …… 82～92

編集後記 …… 94

第六号

昭和六年十一月一日発行菊判定価三十銭（裏表紙では二十五銭）

発行所 東京派社編集兼発行者 能勢馨表紙・カット 穂坂静児

作品

病気（田村泰次郎） …… 2～5

世俗的に（沖和一） …… 39～46

スマイルン（河田誠一） …… 6～9

評論
約束について（吉村鉄太郎） …… 47～49

聖地（宮川健一郎） …… 10～18

堕ちる（百田宗治） …… 24～25

生殖（三浦隆蔵） …… 19～21

東京派作品 Memo—自一号……至六号 …… 50～52

美斑（和田茂） …… 22～23

編集後記 …… 53

三稜鏡（古賀平八） …… 26～38

プリズム

付2 『河田誠一詩集』全文

以下に、『河田誠一詩集』（昭森社 一九四〇年）の全文を掲載する。ただし、田村泰次郎、及び井上友一郎の跋文は著作権継続中のため、割愛する。

春

タンサンの泡だつだらう海峡の空は
つめたく暮れた。

なまあたたかいかぜの記憶は
かすんだ雨のなく音。

ポロポロの鳥。

わたしの抱いてねたあなたの肉體は春であつた。

暗礁

燈台をいただき

まひる、海にしづむ人魚の妖艶なかなしみを思へ。

灯よ。

夜ごとむなそこにかんずる波のいのちに

戦火とほくひびく空間の耳に

春はおそろしき「無」を殺さむとす。

化石

いく日ぞ。

雨天のふかき朝夕をなげきゐて

陽光を見ずにながき一週をすごしつつ。

何物か、雨となりぬ。

江戸菊

かなしき四国の旅よりかへりて

赤きりボンもてかざれるカンカン帽をすてたり。

わが家の植込に弟の持ち来りし江戸菊をにくしみ近づけば

晴れたる今日はかなしげにも美しくみゆ。

カラ梅雨の掌のよごれを洗はず

われらひとりなる夏を苦しみつ。

ある希望

昔、旅役者の淡い影法師を、山の路まで見つけてみた自分であつた。

私は近くその一人として放浪のつめたさをつづける。

時は春。

東京はとほくなつた。鼠大の目をとちた子猫が生れた。

あの人、あの友。みんな、忘れてゆく。

しづかな春よ。

胸の火はあかく、燃えさかる。

遊心

重々し。かくは明るくのどけき晴日に
わがあたま、重々し。

かなしき一年の都会の生活をすてて
我が家の少なき家族にさかる
君はすでに去りてかへらず。

海よ、山よ。

わかれし日の君が着物のみ、ふりかへらずゆきし君のこころよ。

物云はで、母と過さむ数日の後、

かくて、ながきながき放浪に出でんとす。

つめたき人々

つめたき人よ

雪のごとくつめたき人よ。

われはそのごとき人を幻にいただきて

わが前にひざまづく肉を見つ。

あはれ、つめたき人にあらざりしいたみよ。

つめたく痛き心もてわれを射殺せざる心よ。

つめたき人よ

氷のごとくかたくつめたきひとよ。

きたりてわれをなぐれ。

なぐらるるいたみにわれもしなかば

紙のごとき女はとほく去らむ。

短唱

眼に青葉

こころは雨に

うらぶれて

朝寝の夏の

どんぞこ時雨

山に日がてる

青々と

すみ切つて

晴れたとてかなし

君のなき

重きこころのいく日つづく。

オイ

戸を開けろ。

オイ。

戸を開けろ。

そとは月夜の晴れた空だ。

なんにもうごいてゐないんだ。

オイ。

着物をぬいで出て見ろ。

そとはすばらしい死の世界だ。

オイ。

女はバカだぜ。裸で歩いてゐて自分でしらない。

オイ。

死んでくれろ。

外はすばらしい月夜だ。

過ぎゆく日

ひるごろ、雲が流れ去つたよ
そして俺は顔を洗つた。

あいつのこゑももうとほくなつたやうだ。

俺の耳にきこえる一日の音響は
単調な船の艫ごゑだ。

裏の家で鶏の産卵がはじまつてゐる。

バカなことだ。

さうしていつがくればカラリと晴れたところになれるのだ。

このまま一生がすぎてゆく？

それは耐へられないことだ。

それならば、俺はいまでも死んで見せる。

雨天の

はるばると歩みゆかむ哉。
はるばると歩みゆかむ哉。

忘れきし万年筆を

君が農村の静けき住居の疎林のあたり

雨天の

雨天の

雀のごとくおろかにも

ぬれて炎天のほこりのなかを。

花のなき一夏

都会の友のいかにあるらむ。

鼻血

わたしはおまへとながくわかれてゐるのがさびしい。

わたしはおまへの生ぬるい感触にひたるのがすきだ。

都会の雑踏の中のおまへを思ふ。あの時ハンカチをくれた路傍の少女をおもふ。

三時間の激論のはてに出たおまへの黒さよ。

お前が俺の鼻からポタリと落ちる文明的な音。

俺は朝の枕もとに、洗面器の中によくおまへを見出した。

そしてかなしくなるのであつた。

そのかなしくなるのがすきであつた。

おまへと長くあはない。

おれの生活のモノトニイがおまへにあいそをつかしたのか。

モノトニイ。

オイ。モノトニイを殺してくれ。誰か誰か！

さくら花 — 1 —

見てはならないものを見た。ねざめの汗ばみの中にもえさかる火に、
時代の潮流と、大陸の臭気と、野天のひかり。

思へばそれもほのかな白昼夢に置かれた自分の周囲であつたが。
自分の翳であつたが。

女を殺すさくらの花は火龍だつた。

フラフラとうかんだ女の肉體をはづかしめようとして

蟲！ ああ臭気ふんぶんたる蟲の蠕形に嫌悪を見た。

さくら花 — 2 —

夜をこめて、月のあかりに流れくる

海の妖魔のおそろしさ

かかる道何故にすすみえざるや

海辺の家の夜をこめて。

かくてこそ

いまだもみざるくらがりに

秋の鼠のくろさもにくく

東洋のレギイネ！

おろかなりし海にもたれ
いまははやゆくへもとほく
われがゆくなれ。

残雪

ある日

あはれなる女と子との色あせし写真を見出しぬ。

今日

あんず すももはひらく。

わが母を生みすてゆきし祖母はおろかなる女なり。

かくていくたび嫁しゆきしことぞ。

孫二人 あはれなる恋をしたれば

春はくるしきものとなりたり。

ここに 残雪のごとき鋭きいたみをいだきて

あいするものはかへらず。

夏ちかし

いまもなほあふひの花はさきたり。

ガラス戸の中にある田舎の町の写真よりもさびしきは

ほこりにまみれたるそれよりかなしきは

あはれなる女と子といたましき写真の

残雪のごときすさまじきかなしみなり。

燃ゆる村落 放浪詩篇その一

人間がアミーバであつた時以来

鴉が「鳥」であつた時以来

炎天はいまにもかはりあらざりしならん。

われ、一日、太陽の寂寥になきやまざりしことのありたれば

月蝕の臭き春は暮れたり。

国境にひくく雨の山脈を俯瞰しつつ

自動車は骨のごとき人間をのせて下りぬ。

されど、わがごとき心重き足どりぞ。

夏はやく鶯の彼岸をはさみて憩へば

ああ苦行の溪谷のそこふかき花の群落の

碧潭のまひるをおほひたり。

火の花よ。

美しく素朴なる少女は裸體となりて水浴みせり。

そは、何の花かしらねども。

わがゆけば、いまはいづこも燃ゆる村落に見ゆ。

わが恋にやぶれて、うらぶれし白昼夢とも見よ。

犬のごとき女ぞ、わが朝夕に欠きたれば

われは孤独となりぬ。

風塵の故郷 放浪詩篇その二

あれが二人であるいた最後であつたねえ。

おお、レギイネよ。

はつなつの、人生の嵐は熱い碧空から下りて来た。

おまへの着物の裾と俺の古びたレエンコオトのすそ。

しがみついて哭いて明かしたおまへのこころの電波が俺の旅出をものうくした。

おまへには何も無い。

(肉親も、金も、ああ本当のプロレタリア)

あの道をどうしていつまでもいつまでも

すべての物質や義理と闘はなかつたかに哭けてくる。

あれが俺の一生の苦悩であつた。

都会への狂奔と、故郷への叛逆。

いつまで俺はそのために、なぜそのためにたたかはねばならないのか！

レギイネ！

俺は、故郷に吹きあげるかぜほりを涙で泥にしたおまへを考へる。

おまへは食ふために、どうして働いてゐるのか？

それを問ふのをやめよう。

俺はけふもまた一つの国境をこえた。

おまへのからだと俺のからだ……

おまへのいのちとおれのいのち。

明日はまた、俺は暗い溪谷を走らねばならない。

哭く

自動車の中かで 夏のはじめの涼しいかぜにぬれ
麦畑中の山道をゆられてゆく。

その朝 とある町に自動車をすてて歩みゆく家とはよく
陽光は淡い灼熱となつたよ。

わが家をはなれてなくなくあいつの家にたたずんだ俺。

ぼんやりとあいつは泪ぐんでゐたとこだった。

ぼんやりと

さうだ。いまもぼんやりと考へに沈んで居らう。

トミよ。

けふは一日中おまへのまぼろしを忘れようとして
海で過した。

沖の島かげで釣つた魚がどんなに可憐であつたか。

夕ぐれに

俺たちは釣をやめて魚を放つた。

あとで 俺は悲しかった。

母よ。トミを呼びもどして下さい。

ほくと母と弟との三人の家族

俺は どうしたらいいのでござらう母上。

あいつは父も母もないひとりぼっちだ。

あの可愛い女はぼくの朝夕のいのちだったに。

今夜は蛙が啼かない。

月もない。

ほんやりと あいつはまつくらの空を眺めてあるだらう。

南方哀別日

I

波止場の臭い今治のお堀の午後のカヤツチボオル。

煙草屋にちかい家の奥さんは

親切におちついた道をおしへた。

青葉と紙の燈籠。

いまははやにごれる物貨のほこりと帆柱に

臭い臭い海の黒さとほこりを拾つてゆく。

II

ゆふぐれ、いたみにはれた眼をあげて

松山の城をのぞみぬ。

すでにくらき街の電車は

東京の車掌のごとき不親切さを見ず。

道後！ 道後

さやかに、いでゆにひたり
おろかなるねむりになけり。

Ⅲ

われはかのフチなし眼鏡の女中の
美しからざれど

色白く、やさしき日本の礼儀を見たり。

小さき温泉の町は

かくも、田舎の風呂のごときかな。

Ⅲ

繁つた山脈、雨、けしのやうに赤い桜、飛沫。

犬寄峠ののほりを三里

雨かぜしだいにすすしかりけり。

亜米利加帰朝の紳士の会話が菌切れのよいひびき
をつたへてうしろの席をみはらせる。

雨よ。

人間はあまりにふかい山間と溪谷を見下し

死蛇曲りの人どほりなき

ふかい山中にふみて入る。

となりに居たる少女の声あまりにおとなしく気品ありしを午すぎ

大洲にちかく降りてゆけり。

ものがなしきあわただしさをいまもいだきて

卯の町のささやかなるとほりの人ごみに

雨もまたあわただしくふりて来りぬ。

春の港

ちち色の夕のそら。

おびえた おとろへたころをいだいて

さびしくなくなるとなだめてわかれた

港のまちのひと

小さなこひびと。

苦悩に死んだオレのこころの墓に

ゆふべ ゆふべの祈りを捧げる

みなどの 晴れわたつた春の日

東京の かぜのきびしい日に

肺がうつろになり

げくろげくろとうごめくものが

心のつまつてゐるふくろを蝕んでゐるんだ

俺のこころにうかんでくる港のまちのふるさとに

どつかで どらがなり

ばあんとあがるつかれたパツシヨン。

いまこの花壺にいううつの花が咲いたが

そのいろに映ずる 船 船

港 いううつにすすけたみなど。

あの人の船がもう あの港の春をたづねないのであらうか。

炎天

晴れわたる初夏の午笛に

眼覚めて疎林と畑の彼方 海をのぞめば

君をはるばる炎天の下にたづね来しわれの涙ぞ。

顔洗ふころ重たく

その夕 帰れば わが家に一人なる母は泣きてありたり。

遂に 物を畳にぶちつけてすすりなく母。

われはただ われのころをかなしめども。

夜はやく蛙啼く海ちかき田舎町をふけつつ君をおもふ ころは

いかにくるしきことぞ。

かくて 君をしてわがそばを遠ざけし母はかなし
げに

君を淫売婦とののしりぬ。

父母のなき ただひとりなる君

君 わがもとをさりゆかば いかにあるらむ。

母よ。

炎天の夏の町とならむとす。

東京の友は　くるしくたよりかきて

もはやわれの帰京を強ひずとなきて来りぬ。

ポツネンと祖母と二人　考へに沈める君をおもへば

わがごころ　自責と悔恨のいたみのなかに

ときがたき母のころをおもひてはてなし。

悲惨の港

朝、水煙をのこして去る。船の纜をあげて、地獄の鬼をのせ、
ヒマラヤの白雪を積み、悲惨の港を出づ。

こは、傷つきし者のみ。闘ひの火焰に髪焼けし者のみ。

われの歎ばしむるところ。われのかなしむところ。

みなとほく洋上にありて、雨にぬれしパン、腐れし牛乳は、

水路三日にして下船せし地獄の鬼にのこさせむとせしなり。

悲惨のみなどに行け。

春ふけし夜をこめてゆけ。

街々の酒は苦く、船宿の女は美しからず。

されど、赤黒き愛欲の

つめたく重い花のいのちになかむ。

哭くは人にあらざりき。

燃ゆるは犬にあらざりき。

かくて犬のごとき人のみゆけ、悲惨の港。

うるはしくなつかしき悲惨の港。

われ、かの港にて犯せし殺人の罪科の追放にあまんじ

いまより後、苦悩をしばる牛を飼はむとし、大陸の砂漠にゆかむとす。

(くわがき こうへい 高田早苗記念研究図書館担当課)
(はせがわ あつし 図書館情報管理課長 兼 戸山図書館担当課長)